

オリゲネス 『エレミヤ書説教』 のギリシア語原典 とヒエロニムスによるラテン語訳の日本語対訳： 第10、 第11、 第12、 第13説教

加藤， 哲平
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7392971>

出版情報：言語文化論究. 55, pp.67-116, 2025-10-29. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典と ヒエロニムスによるラテン語訳の日本語対訳： 第10、第11、第12、第13説教

加 藤 哲 平

本説教の緒論や翻訳の凡例については、加藤哲平「オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典とヒエロニムスによるラテン語訳の日本語対訳：第1説教」『言語文化論究』第52号、2024年、125-53頁を参照されたい。

第10説教（エレ11:1-10）＝ラテン語訳の第8説教

解説

第10説教は、エレ11:1-10を題材とした中編である（全8節）。第1節では、神のみを教師として学ぶことや、救い主が自分に起こることを「無邪気な子羊のように知らない」ことが述べられる。第2節では、ユダヤ人がイエスの受難（「木」）を彼の言葉（「パン」）に投げ込んだ——すなわち彼を十字架につけた——が、むしろそのことによって彼の言葉は力を得たと論じられる。第3節では、地に落ちて死んだ麦の粒が多くの実をもたらすように、イエスの死も多くの実りをもたらすと説明される。第4節では、列王記や歴代誌を参照した「アナトト」という語の比喩的解釈や、エルサレムの滅亡に関する預言について述べられる。第5節では、「不敬虔な者たち」としてグノーシス主義者たちが批判され、彼らの「清め」について語られる。第6節では、「地が嘆く」のように諸元素を擬人化した表現の背後には、実はそれぞれの要素のために配置された天使たちがいると説明される。第7節では、「家」や「相続財産」の比喩に基づいて、イエスが天から地上に下ったことが述べられる。そして第8節では、ユダヤ人が「獅子」や「ハイエナ」に喩えられ、そのような者たちではなく天使たちに自分が引き渡されるように、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

「私に知らせてください、主よ、すると私は知るだろう」について。「あらゆる野の獣を集め、彼らが彼女を食べるために来させなさい」まで。

第1節

（ギリシア語）

もし神の託宣が、律法や預言者たちに、諸福

（ラテン語訳）

もし神の雄弁が、律法や預言者たちに、諸福

音書や使徒たちにあるなら、神の言葉によって教えられる者が神を教師として割り当てることが必要になるでしょう。というのも、「人に知識を教える者」(詩93 [94]:10) とは、神のことだからです、詩編にも書かれているように。しかし救い主は、誰かが地上で教師として割り当てられる必要はないと証言して、次のように言っています、「またあなたがた自身が地上で〔誰かを〕教師と呼んではならない。なぜなら、あなたがたの教師は一人、天の父だからである」(マタ23:8以下)。〈「天の父が」〉教えるのは、あるいは自分自身で、あるいはキリストを通じて、あるいは聖霊において、あるいはパウロを通じて、さらに言えば、あるいはペトロを通じて、あるいは他の聖者たちの誰かを通じてであるが、ただ神の霊と神の言葉こそが留まり、教えるべきです。こうしたことは何のために私によって語られているのでしょうか。預言者が「私に知らせてください、主よ、すると私は知るだろう」(エレ11:18) と言っているからです。というのも、私は知ることはないでしょう、もしあなたが私に知らせてくれないなら。しかしもし、あなたが私に知らせてくれたために、私が知るなら、私は「そのとき彼らの仕事を」(エレ11:18) 見るでしょうし、また各々が行うことや、諸々の意志がどんな性質であるかを理解するでしょう。

これらのことを預言者は「言いました」。それから、救い主が預言者において何を言っているのか、見てみましょう。「私自身は、屠られるために連れていかれる無邪気な子羊のように、知らなかった。私に対して、彼らは企みを企み、言った、『来なさい、そして木を彼のパンへと投げ込もう、そしてそれを生者たちの地から一掃しよう。そして彼の名がもはや思い出されることのないように』」(エレ11:19)。預言者イザヤもまた言っているように、キリストは、「羊のように、屠畜のために連れていかれ、小羊のように、毛を刈る者の前で沈黙し、かくしてその口を開かない」(イザ53:7)。今のところでは、確

音書や使徒たちにあるなら、神の弟子が神を神的な言葉の教師として割り当てることが必要です。というのも、「人に知識を教える者」(詩93 [94]:10) とは、詩編によれば、神のことだからです。救い主もまた、誰も地上で教師と呼ばれるべきではない、という証言を提供して、次のように言っています、「またあなたがた自身が地上で〔誰かを〕教師と呼んではならない。なぜなら、あなたがたの教師は一人、天の父だからである」(マタ23:8以下)。しかし、「天の父が」人々を教えるのは、あるいは自分自身を通じて、あるいは子を通じて、あるいは聖霊を通じてです。また、より小さな者たちへと行くと、彼が教えるのは、パウロを通じて、ペトロを通じて、聖者たちのうちの他の誰でもを通じてです。ただ神の霊と神の言葉こそが降りてきて、教えるべきです。こうしたことをなぜ私は語ったのでしょうか。もちろん、預言者が「私に知らせてください、主よ、すると私は知るだろう」(エレ11:18) と言っているからです。というのも、私は知ることはできません、もしあなたが私に明らかにしてくれなかったなら。しかしもし、あなたが私に知らせてくれたために、自分が知らないことを私が知ることができるなら、私はそのとき各々の者たちの考えを見るでしょうし、また各々が何を行い、それが誰の意志であるかを理解するでしょう。

これらのことを預言者は「言いました」。それから、救い主が預言者において何を言っているのか、見てみましょう。「私自身は、犠牲にされるために連れていかれる無邪気な子羊のように、知ることさえなかった。私に対して、彼らは計画を考え、言った、『来なさい、そして木を彼のパンへと投げよう、そしてそれを生者たちの地から粉砕しよう。そして彼の名はもはや思い出されることはないだろう』」(エレ11:19)。イザヤもまた「言っているように」、キリストは、「羊のように、犠牲のために連れていかれ、子羊のように、毛を刈る者の前で自ら声もなくなり、かくしてその口を開かなかった」(イザ53:7)。

かに、彼についてイザヤが述べていますが、次のところでは、キリストが自分自身について述べています、「私自身は、屠られるために屠畜へと連れていかれる無邪気な子羊のように、知らなかった」（エレ11:19）。彼は、何を自分が知らなかったかを言っていない。というのも、彼は「私は悪いものを知らなかった」とは言わず、「私は善いものを知らなかった」とも言わず、「私は罪を知らなかった」とも言わず、むしろ単に「私は知らなかった」と言ったのです。したがって、彼は、自分が何を知らなかったのかを調べることを、あなたに残したのです。そして、「彼〔神〕は、罪を知らない者〔キリスト〕を、私たちのために罪とした」（Ⅱコリ 5:21）という一節から、彼が何を知らなかったのかを学んでください。というのも、罪を知ることは罪を犯すことです、ちょうど正義を知ることは正義を行うことであるように。したがって、正義に関することを宣べ伝えるが、正義を行わない者は、正義を知らなかったということなのです。

第2節

（ギリシア語）

「私に対して、彼らは企みを企み、言った、『来なさい、そして木を彼のパンへと投げ込もう』（エレ11:19）。ユダヤ人たちが彼を十字架にかけたこと、このことは明らかであり、このことを私たちは公然と宣べ伝えています。あなたがどのようにしてこのことを、「私に対して、彼らは企みを企み、言った、『来なさい、そして木を彼のパンへと投げ込もう』」に当てはめるかを、考えなければいけません。イエスのパンとは、私たちがその中で栄養を与えられる言葉です。彼が民に教えていたときに、彼を十字架につけることを通じて、彼らが彼の教え〔の中〕に躓きを増し加えようとしたので、彼らは「木を彼のパンへと投げ込もう」と言ったのです。というのも、教師を十字架につけることが、イエスの教えの言葉に当てはめられるとき、彼のパン

今のところでも、確かに、キリストについて彼が述べていますが、次のところでは、キリスト自身が自分自身について述べています、「私自身は、犠牲にされるために連れていかれる無邪気な子羊のように、知ることさえなかった」（エレ11:19）。彼は、自分が知らなかったことを付け加えていません。というのも、彼は「私は悪いものを知らなかった、私は善いものを知らなかった、私は罪を知らなかった、不当さなしに」とは言わず、むしろ単に「私は知らなかった」と言ったのです。したがって、彼は、自分が知らなかったことをあなたが調べることを、あなたに残したのです。使徒を読んでください、「彼〔キリスト〕は、罪を知らなかったので、私たちのために〔自らを〕罪とした」（Ⅱコリ 5:21）。というのも、罪を知ることは罪を犯すことです、ちょうど正義を知ることは正しく行うことであるように。このことから明らかなのは、正義を宣べ伝えるが、正しく行わない者は、正義を知らないということなのです。

（ラテン語訳）

「私に対して、彼らは計画を考え、言った、『来なさい、そして木を彼のパンへと投げよう』（エレ11:19）。ユダヤ人たちによって主が十字架にかけられたことは、誰にとっても疑いないことです。また私たちが完全な自由の中でこのことを宣べ伝えているのであれば、私たちはどのようにしてこのことに、「私に対して、彼らは計画を考え、言った」と言われていることを当てはめればいいのでしょうか。彼らが述べている、「来なさい、そして木を彼のパンへと投げよう」は、〔解釈が〕非常に難しいです。私たちがその中で栄養を与えられるイエスのパンとは、彼の言葉と解釈されます。それゆえに、彼が民に教えていたときに、ある者たちは彼の教えに躓きを置こうとしたので、彼らは彼を十字架につけて、「来なさい、そして木を彼のパンへと投げよう」

へと木が投げ込まれたのです。したがって、企てを考えたかの者たちには、「来なさい、そして木を彼のパンへと投げ込もう」と言わせておきましょう。しかし、私としては、逆説的にこう言いましょう、「彼のパンへと投げ込まれた木は、パンをより良いものにしたのだ」と。私はモーセの律法から例を取りましょう。苦い水へと投げられた木は、それ〔水〕を甘くしました(出15:25)。同様に、イエス・キリストの受難という木は、言葉へと入っていったときに、彼のパンをより甘くしたのです。実際、木が彼のパンへと入る前、彼の教えの中にパンだけがあり、木がなかったときには、「彼の声は全地へと出て行き」(詩18 [19]:5) ませんでした。しかし、パンは自らへと投げられた木を通じて力を受け取ったので、このことゆえに、彼の教えの言葉は世界中を満たしているのです。そしてそのとき、木はイエスの受難の象徴となり、それによって苦い水は甘くなりました。というのも、私自身言いたいのは、律法は、知覚されないときには苦い水ですが、もしイエスという木が来て、私の救い主の教えが留まるなら、モーセの律法は、それが読まれて知られるときに甘くなり、かつ最も快いものとなるということです。

したがって、彼らは「来なさい、そして木を彼のパンへと投げ込もう」と言ったのです。

第3節

(ギリシア語)

(承前) しかし、彼ら〔ユダヤ人たち〕は「それを生者たちの地から一掃しよう。そして彼の名がもはや思い出されることのないように」(エレ11:19) とも言っています。このように、彼らは彼〔イエス〕を殺し、彼の名を消し去ろうとしたのです。しかし、イエスは自分がどのように、また何のために殺されるのかを知っていました。それゆえに、彼は、「もし麦の粒が地に落

と行ったのです。というのも、教師の磔がイエスの言葉や彼の教えに結び付けられるとき、パンへと木が投げ込まれたのです。そこで、陰謀をめぐらしていたかの者たちは、確かに、「来なさい、そして木を彼のパンへと投げよう」と言っています。しかし、私としては、次のような逆説的なことを言いましょう、「彼のパンへと投げられた木は、パンをより良いものにしたのだ」と。モーセの律法から例を取ってみてください。苦い水へと投げられた木を、彼〔モーセ〕が甘くしたように(出15:25)、キリストの受難という木は、彼の教えへと投げられたときに、彼のパンをより甘くしたのです。というのも、木が彼のパンへと投げ込まれる前、パンだけがあり、木がなかったときには、「彼の声は全地へと出て行き」(詩18 [19]:5) ませんでした。しかし、それ〔パン〕が木を通じて力を受け取った後、そのときに、彼の受難の言葉は世界中に広められたのです。その比喻によって、旧約聖書における水もまた、木との接触の結果、甘くされました。というのも、私自身言いたいのは、律法は、知覚されないときには苦い水だということです。しかし、イエス・キリストという木が来て、私の救い主の言葉がそれ〔水〕に降りてくるとき、そのときモーセの律法は、それが理解され、同時に読まれるときに甘くなり、かつ最も快い味のものとなります。

したがって、彼らは「来なさい、そして木を彼のパンへと投げよう」と行ったのです。

(ラテン語訳)

(承前) しかし、彼ら〔ユダヤ人たち〕は「それを生者たちの地から粉砕しよう。そして彼の名はもはや思い出されることはないだろう」(エレ11:19) とも付け加えています。というのも、このように、彼らは彼〔イエス〕を殺し、彼の名を完全に消し去ろうとしたのです。しかし、イエスは自分がどのように、またどんな方法で殺されるのかを知っていました。それゆえに、彼

ちて死ななければ、それはただ一つのみである。しかし、もしそれが死ねば、多くの実をもたらす」(ヨハ12:24)と言っているのです。その結果、イエスの死は麦の穂となり、蒔かれたものを何倍にも、大量にもしています(ルカ8:8、マタ13:8参照)。ちょうど、もし仮に彼が十字架にかけられず、また死にもしなかったとしたら、麦の粒はただ一つのみであったように、そしてその粒から多くのものが生じることもなかったように。したがって、彼はこのことを言いたかったのではないかと、[次の]彼の発言に注意してください、「もし麦の粒が地に落ちて死ななければ、それはただ一つのみである。しかし、もしそれが死ねば、多くの実をもたらす」(ヨハ12:24)。イエスの死はこれらのことすべてを結実させましたが、もしその死がこれほどたくさんのことを結実させたのなら、その復活はどれほどたくさんのことを結実させることでしょう。

第4節

(ギリシア語)

「正しいものを裁き、腎臓と心を試す万軍の主よ、彼らのゆえのあなたからの復讐を私が見えますように」(エレ11:20)。彼はこれらのことを、彼らのゆえの神からの復讐を見ることを、預言的に祈っています。というのも、エルサレムは軍隊によって囲まれ、その荒廃が近づいたからです(ルカ21:20)。そして彼女〔エルサレム〕には、「見よ、お前たちの家はお前たちから見捨てられる」(マタ23:38)と言われました。したがって、「彼らにおけるあなたからの復讐を私が見えますように、なぜなら、私は私の要求をあなたに示したのだから。このことゆえに、アナトトの人々について、次のようなことを主は言っている。〔彼らは〕私の魂を狙い、『主の名において預言してはいけない。そうしなければ、お前たちは私たちの手によって死ぬことはない』」などと言っている。見よ、私の方こそ彼

は、「もし麦の粒が地に落ちて死ななければ、それはたくさんの実をもたらすことはない」(ヨハ12:24)と言っているのです。それゆえに、イエスの死は麦の穂となり、七倍になり、そして蒔かれたものよりもはるかに多く回収することになります(ルカ8:8、マタ13:8参照)。というのも、少し想像してみましょう、彼が十字架にかけられず、また死後に冥界へと降りてもいかなかったと。すると結果として、麦の粒はただ一つのみであり、その粒から多くのものが生じることもないということになります。〔次の〕神的な発言に細心の注意を払ってください、〔その発言が〕それ自体の中で何が理解されるように望んでいるのかと。「もし麦の粒が地に落ちて死ななければ、それはたくさんの実をもたらすことはない」(ヨハ12:24)。イエスの死はこれらのことすべてを結実させましたが、もしその死がこれほどたくさんのことに実をもたらしたのなら、その復活はどのような豊かさのそれとなるでしょう。

(ラテン語訳)

「正しいものを裁き、腎臓と心を試す力ある主よ、彼らのゆえのあなたからの復讐を私が見えますように」(エレ11:20)。彼はこれらのことを、彼らのゆえの父の面前での復讐を見ることを、預言的に祈っています。というのも、エルサレムは軍隊によって囲まれ、その荒廃が近づいたからです(ルカ21:20)。そして彼女〔エルサレム〕に対して言われたこと、「見よ、お前たちの荒れ果てた家はお前たちから見捨てられる」(マタ23:38)は成就されました。したがって、「彼らのゆえのあなたからの復讐を私が見えますように、なぜなら、私は私の弁明をあなたに示したのだから。このことゆえに、アナトトにいる人々について、次のようなことを主は言っている。〔彼らは〕私の魂を狙い、『主の名において預言してはいけない。そうしなければ、お前たちは私たちの手によって死ぬだろう』」などと

らのところへ訪ねよう。彼らの若者たちは剣によって死に、そして彼らの息子たちや彼らの娘たちは飢えによって終わりを迎えることになるだろう。そして彼らの痕跡はなくなるだろう、なぜなら、私はアナトトの住人たちに、彼らへの訪問の年に、悪いものをもたらすだろうから」(エレ11:20-23)。ここでは、アナトトという名は比喩的に取られます。しかしユダヤの秘儀の全体が、それ「アナトトという語」の中で比喩的に述べられています。というのも、アナトトは従順と訳されるのです。〈したがって、〉神の〈従順は〉、神の王国もまたそうであるように、かの民の中にあり、また王国については、「神の国はあなたがたから取り上げられ、実を結ぶ民に与えられるだろう」(マタ21:43)ということになっている〈ので〉、このことに基づいて、アナトトの人々、すなわち従順になっている者たちもまた、エレミヤのではない魂を狙うということになります。というのも、アナトトの人々がエレミヤの魂を狙った、とは歴史は言っていないからです。私たちは諸王国〔列王記〕を持っており、その書物はそこでエレミヤを想起しましたが(王下23:31;24:18)、そうしたことはそれら〔列王記〕では言われていませんし、〈一方で〉歴代誌でも言われていません。というのも、私たちは預言者〔エレミヤ〕の書それ自体を持っていますが、アナトトの人々は何も言わなかったからです。むしろこれらのことはキリストについて述べられているのでした。

「〔彼らは〕言っている、私の魂を狙い、『主の名において預言してはいけない』——ユダヤ人たちはイエスが教えることを許しませんでした——『『そうしなければ、お前たちは私たちの手によって死ぬことはない』と。見よ、私の方こそ彼らのところへ訪ねよう。彼らの若者たちは剣によって死に、そして彼らの息子たちや彼らの娘たちは飢えによって終わりを迎えることになるだろう」(エレ11:21以下)。彼らが剣によって終わりを迎えたのはそのときではなく、略奪の後のことであり、今や飢えが彼らのところに

言っている。見よ、私の方こそ彼らのところへ訪ねよう。彼らの若者たちは剣によって滅び、そして彼らの息子たちや娘たちは飢えによって死ぬだろう。そして彼らの痕跡はなくなるだろう、なぜなら、私はアナトトの住人たちに、彼らへの訪問の年に、悪いものをもたらすだろうから」(エレ11:20-23)。ここでは、アナトトという名は比喩的に取られます。しかしユダヤの秘儀の全体が、それ「アナトトという語」の中にあります。というのも、アナトトは従順と訳されるのです。したがって、神の従順は、彼の王国もまたそうであるように、彼らの中にあり、また王国については、「神の国はあなたがたから取り上げられ、彼の実を結ぶ民に与えられるだろう」(マタ21:43)と預言されたこととして私たちが知っていることがなされましたので、今やアナトト、すなわち従順にいる人々もまた、エレミヤのではない魂を狙っています。というのも、どんな歴史もこのこと、すなわちアナトトの人々がエレミヤの魂を狙ったとは言っていないのです。私たちは諸王国の書を持っており、その書物はそこでエレミヤを想起しましたが(王下23:31;24:18)、そうしたことは何も記録されていません。私たちは歴代誌を持っており、そして今解釈されていることそのものは預言者の巻物ですが、アナトト出身の人々は何も言いませんでした。むしろ彼らはキリストの、我が主の魂を狙っているのでした。

「彼らは言っている、『主の名において預言してはいけない』——私たちはここでも、キリストが教えないようにユダヤ人たちによって禁じられていることを読んでいます——『『そうしなければ、お前たちは私たちの手によって死ぬだろう』と。見よ、私の方こそ彼らのところへ訪ねよう。彼らの若者たちは剣によって滅び、そして彼らの息子たちや娘たちは飢えによって死ぬだろう」(エレ11:21以下)。彼らが剣によって死んで横たわったのはエレミヤの時代ではなく、主の到来の後のことであり、そのとき飢えが彼らのところにやってきたのです、「それはパ

やってきたのです、「それはパンの飢えでも、水の渇きでもなく、むしろ主の言葉を聞くことの飢えである」（アモ 8:11）。というのも、「全能者である主は」もはや彼らの傍で「このようなことを言って」はいないと言われています。この飢えとは、預言がもはやないことを指しますが、ではなぜ私は預言を語るのでしょうか。〔それは〕教えではありません。そしてもし彼らが彼らから賢者という称号を一万回得るのだとしても、主の言葉はもはや彼らにはないのです、なぜなら次の一節が成就したからです、すなわち、「主はユダから、そしてエルサレムから取り去る、強い男や強い女を、巨人や強い男を、兵士、裁判官、預言者、占い師、老人、五十人隊長、驚くべき助言者、賢い建築家、聡明な聞き手を」（イザ 3:1-3）。もはや彼らの傍らで、「賢い建築家のように、私は土台を据えた」（Ⅰコリ 3:10）と言うことはできません。建築家たちは去り、教会に行き、イエス・キリストを土台として据えました（Ⅰコリ 3:11）。その上に、彼らの後の者たちもまた建て増しました。

第5節

（ギリシア語）

（承前）したがって、かの民は飢えの中で見捨てられました。というのも、「私はアナトトの住人たちに、彼らへの訪問の年に、悪いものを」、彼らの上に「もたらすだろうから」（エレ11:23）。

「正しいのはあなたです、主よ。なぜなら、私はあなたに〔自分のことを〕弁明するであろうから。それでもなお、私はあなたに私の判断を語りたい。〈なぜ〉不敬虔な者たちの道は栄えるのだろうか。また約束を破るすべての者たちは盛んになるのだろうか」（エレ12:1）。神——律法と預言者たちを与えてくれた方——が善であるのかどうかを、今でも私たちは尋ねています。「不敬虔な者たちの道が栄えている」が、彼がその不敬虔な者たちを罰さないのを見ているからです。「約束を破るすべての者たちは盛んにな

ンの飢えでも、水の渇きでもなく、むしろ主の言葉を聞くことの飢えである」（アモ 8:11）。というのも、今や彼らのもとでもはや「全能である主なる神はこれらのことを言った」とは言われていないのです。この飢えとは、彼らの間で預言が止んでしまったことを指しますが、ではなぜ私は預言について語るのでしょうか。ユダヤには教師も学者も、少しも残っていませんでした。自分自身に知識があると称した者たちは無数にいますが、神の言葉は今や彼らにはないのです、なぜならこの予言が成就したからです、すなわち、「主はユダから、そしてエルサレムから取り去る、強い男や強い女を、パンの力、水の力、強い巨人、兵士、裁判官、預言者、審判者、五十歳の老人たち、驚くべき助言者、賢い建築家、聡明な聞き手を」（イザ 3:1-3）。もはや彼らの間で、「賢い建築家のように、私は土台を据えた」（Ⅰコリ 3:10）とすることができる者はいません。建築家たちは彼らから去り、教会に行き、イエス・キリストを土台として据えました（Ⅰコリ 3:11）。その上に、彼らの後に信じた者たちは誰でも建て増しました。

（ラテン語訳）

（承前）したがって、かの民は飢えの中で見捨てられました。というのも、「私はアナトトの住人たちに、彼らへの訪問の年に、悪いものをもたらすだろうから」（エレ11:23）。

「正しいのはあなたです、主よ。なぜなら、私はあなたに自分のことを弁明するであろうから。それでもなお、私はあなたに私の判断を語りたい。なぜ罪人たちの道は栄えるのだろうか。彼らが侮りつつ軽蔑していたすべての者たちは、豊かになった」（エレ12:1）。神——律法と預言者たちを与えてくれた方——が善であるのかどうかを尋ねてみましょう。「不敬虔な者たちの道が栄えている」が、彼らがその過失に応じて彼らから何も〔罰を〕受けることがないのを見ているからです。というのも、〔神を〕侮りつつ蔑ん

る」。造物主に反対して述べる者たちは、彼を中傷しつつ、「盛んになり」、「植えられ、かつ根付かせられ、子をなし〈、かつ〉実を〈なした〉」(エレ12:2)。マルキオンが子をなした実はどれほど多く、バシレイデスのそれはどれほど多く、ウァレンティノスのそれはどれほど多いのでしょうか。というのも、これ〔実〕は、「彼らは子をなし、かつ実をなした」の一節において、不敬虔な者たちについて預言されたことや述べられたことを指しています。「あなた自身は彼らの口には近いが、彼らの腎臓からは遠い」(エレ12:2)。彼らはイエスの名を呼びますが、イエスを持ってはいないのです。というのも、彼らは彼を必要なものとして認めることがないからです。「そして、主よ、あなたは私を知っている、あなたは私を見る、あなたはあなたの前で私の心を試した。彼らの屠畜の日のために、彼らを清めてください」(エレ12:3)。これらのことを私が明らかにするために、私は何をしたらよいのでしょうか。彼は、清めを、罰される者たちの罰と言っています。というのも、「彼らの屠畜の日のために、彼らを清めてください」と彼が言っているのは、すなわち、「彼らを屠畜することによって、彼らを清めてください」ということだからです。「主は自分が愛する者を鍛え、自分が受け入れたすべての子を鞭打つ」(箴3:12、ヘブ12:6)。

第6節

(ギリシア語)

「いつまで地は嘆き、野原の牧草は枯れているのか、そこに住む者たちの悪ゆえに」(エレ12:4)。預言者はここでも、地がその上に乗っている者たちの悪のゆえに嘆いていると言うことで、地が生きていることに関してのように論じています。したがって、私たちの一人ひとりに関して、地は、あるいは嘆き、あるいは喜ぶのです。というのも、一方では、地はその中に住んでいる者たちの悪のために嘆いており、他方では、

だすべての者たちは盛んになりました。すなわち、造物主に反対して荒れ狂う喉で吠える者たち、彼を冒瀆的な言葉で中傷する者たちのことです。「彼らは盛んになり、植えられ、かつ根を送った。彼らは子をなし、かつ実をなした」(エレ12:2)。不実の子をもうけることで、マルキオンはどれほど多くの実をなしたのでしょうか。バシレイデスはどれほど多く、ウァレンティノスはどれほど多いのでしょうか。というのも、彼らについて——災いなるかな——彼は預言して言っています、「彼らは子をなし、かつ実をなした。あなた自身は彼らの口には近いが、彼らの腎臓からは遠い」(エレ12:2)。彼らはイエスを呼びますが、彼を持ってはいないのです。というのも、彼らは彼をキリストとして認めることがないからです。「そして、主よ、あなたは知っている、あなたはあなたの視界の中で私の心を試した。彼らの屠畜の日に、彼らを聖別してください」(エレ12:3)。このことを私が説明するために、私は何をしたらよいのでしょうか。彼は、拷問を、拷問される者たちの聖別と呼んでいます。というのも、「彼らの屠畜の日に、彼らを聖別してください」と彼が言っているのは、すなわち、「あなたが彼らを屠畜することによって、彼らを聖別してください」ということだからです。というのも、「主は自分が愛する者を弾劾し、自分が受け入れたすべての子を鞭打つ」(箴3:12、ヘブ12:6)。

(ラテン語訳)

「いつまで地は嘆き、すべての野原の牧草は枯れているのか、そこに住む者たちの悪ゆえに」(エレ12:4)。地が生き物であるかのように、そのように預言者は今や論じています、地がその上に乗っている居住者たちが悪いときに嘆いていると言いながら。したがって、私たちの一人ひとりに関して、地は、あるいは隣人たちの徳のために喜び、他方では、悪徳のために嘆いているのです。しかし、もし地がそうするなら、

その中に住んでいる者たちの徳のために喜んで
いるのです。したがって、私たちのそれぞれに
ついて、元素そのものが、一方では喜び、他方
では嘆いているのです。しかし、もし地がそう
するなら、残りの諸元素もまたおそらくそうす
るでしょう。同様に、水や、水の上に配置され
た天使も〔喜んで嘆いたりする〕、と私は言い
ましょう、地もまた嘆くのか嘆かないのかを私
が論じるために。というのも、この肉体、〔すな
わち〕地は、その中に住んでいる者たちゆえに
嘆くことはありません。むしろ私と共に覚えて
おいていただきたいのは、あらゆるものの配列
のために、地の上にはある天使が配置され、水
の上には別の天使が配置され、空気の上にはま
た別の天使が、そして火の上には第四の天使が
配置されているということです。そのようなわ
けで、動物におけるあらゆる配列や、植物にお
ける配列、天の星々における配列へと、理性に
よって、私と共に昇ってください。ある天使は
太陽の上にも配置され、別の〔天使〕は月の上
に、〈また別の〉は星々の上にも〔配置され〕ま
した。私たちが地の上にいる限り共にある、こ
れらの天使たちは、実に、〈私たちが正しく行動
するときには〉喜び、あるいは私たちが罪を犯
すときには私たちについて嘆くのです。彼〔預
言者〕曰く、地は、その中に住んでいる者たち
ゆえに嘆きます。同様に、彼は地そのものの代
わりに、天使を地と呼びました。というのも、
ちょうど「手で作られたものに関して、それ自
体と、それを作った者が呪われる」（ソロ知恵
14:8）とあるように——これは生命のないもの
それ自体が呪われるということではなく、「手で
作られたもの」とは、生命のない像を注意深く
見ること、そしてかの名前で呼ばれることだ
と言っているのです——、そのように、地の上に
配置された天使は地とも呼ばれ、水の上に配置
された天使は水とも呼ばれるのだと、私は言い
たいのです。後者〔水の天使〕に基づいて、次
のように言われています、「大水はあなたを見
た、神よ。大水はあなたを見て恐れ、深淵は大

残りの諸元素もまたそれに続くでしょう、それ
らのうち、水、〔すなわち〕水の上に配置された
天使もまた〔それに続くでしょう〕。というの
も、私は、嘆いている地や喜んでいる〔地〕な
ど、それ以外に説明することはできないからで
す。感覚を持たない肉体が感じると私たちが信
じることを、感覚は受け入れません、次のこと
を私たちが理解することなしには。すなわち、
天使がすべてのもの——空気や火と同様に、地
や水——を監督していることを、すなわち諸元
素を支配していることを、そしてこの秩序によ
ってすべての動物、すべての芽、そして天の星々
自体に至ることを〔理解することなしには〕。他
の天使が地に関して任命されており、またこの
ように、私たちが地において関わる、これら
すべての天使たちは、私たちが正しく行動する
ときには楽しみ、私たちが罪を犯したときには嘆
くのです。地は、その中に住んでいる者たちゆ
えに嘆くでしょう。彼らは地の天使を、地その
ものが名づけられたのと同じ名前で呼んでいま
す。というのも、手で作られたものが呪われて
いるので、それを作った者自身もまた呪われる
（ソロ知恵14:8）ときに——これは、その者が
霊や感覚を持っていないから呪われているので
はなく、同じ者が、手で作られたものが呼ばれ
ているのと同じ名前で呼ばれることで、感覚を
持たない像を助けているから呪われていると言
われているのです——、そのように、地に関し
て任命されたこの天使は、今や地とも呼ばれる
のです。あなたはこのことをただ地に関してだ
けと取るべきではありません。水の天使もまた
その名称で名づけられています、他の箇所で次
のように述べられていることに従って、「大水は
あなたを見た、そして恐れた。深淵はかき回さ
れた。大水の多くの轟きは雲を声としてもたら
し、そしてあなたの矢は通り過ぎた」（詩76
[77]:17以下）。

水の多くの轟きと共にかき回され、雲は音をもたらし、そしてあなたの矢は通り過ぎた」(詩76[77]:17以下)。

第7節

(ギリシア語)

「私は私の家を捨て、私の相続財産を見放し、私の愛する魂をその敵たちの手に与えた」(エレ12:7)。私と共に見てください、「神の形である」(フィリ 2:6) 者は、天にあるのだということを。見てください、天上にある彼の家を。もし彼がさらに高みを見ることを欲するなら——なぜなら「私は父の中に[いる]」(ヨハ14:10, 11)——彼の家が神であることを見てください。彼は「父と母を」(マタ19:5)、「上なるエルサレムを」(ガラ 4:26) 捨て、この世的な場所にやって来て、言いました、「私は私の家を捨て、私の相続財産を見放した」。というのも、それこそが彼の相続財産、天使たちと共にある土地、聖なる力を持つ位階なのです。「私の愛する魂をその敵たちの手に与えた」。彼は、自分自身の魂を引き渡したのです、魂の敵たちの手に、彼を殺したユダヤ人たちの手に、彼に敵対して集まった支配者たちの手に、王たちの手に、「地の王たちが立ち上がり、支配者たちが主に敵対し、またキリスト自身に敵対して、共に集まった」(詩 2:2、使 4:26) ときに。

第8節

(ギリシア語)

「私の相続財産は私に対して森の中の獅子のようになった」(エレ12:8)。彼が相続したという、彼のこの地上の相続財産は、彼に対して野蛮になりました。そしてその相続財産はユダヤ人となり、彼に敵対して「森の中の獅子のように」野蛮になりました。そのとき彼の相続財産が森の中の獅子のようになったとしても、驚いてはいけません。今もお森の中には獅子たちがい

(ラテン語訳)

「私は私の家を捨て、私の相続財産を見放し、私の愛する魂をその敵たちの手に与えた」(エレ12:7)。私と共に見てください、「神の形である」(フィリ 2:6) 者は、天にあるのだということを。見てください、彼の家を、玉座を、そして崇高なそれぞれの力を。しかし、もしあなたが何かより高みにあることを理解することを欲するなら——「私は父の中に、そして父は私の中に」(ヨハ14:10, 11) と彼が言っていることのゆえに——彼の家としての父なる神を見てください。彼は自らの父と自らの母としての天のエルサレムを捨て、そしてこの世的な場所にやって来て、言いました、「私は私の家を捨て、私の相続財産を見放した」。それこそが彼の相続財産としての天使の所有物、聖なる力の位階なのです。「私の愛する魂を私の敵たちの手に与えた」彼は、自分自身の魂を引き渡したのです、自分の敵たちの手に、彼を殺したユダヤ人たちの手に、彼に敵対して集まった支配者たちの手に、王たちの手に、「地の王たちが立ち上がり、支配者たちが共に、主に敵対し、そして彼のキリストに敵対することに同意した」(詩 2:2、使 4:26) ときに。

(ラテン語訳)

「私の相続財産は私に対して森の中の獅子のようになった」(エレ12:8)。彼が財産として自分自身に選んだ、彼の分け前となった、地上にある彼のこの相続財産は、彼に対して野蛮になりました。そして彼の相続財産、すなわちユダヤ人は、「森の中の獅子のように」になりました。このようにそれ〔相続財産〕が凶暴な獣に比べられてきたとしても、驚くべきことではありません

て、イエスを呪っており、彼を中傷しており、また彼を信じる者たちを罠にかけています。したがって、「私の相続財産は私に対して森の中の獅子のようになった。それは私に対してその声を届け、このことゆえに私はそれを憎んだ。私の相続財産は〈私にとって〉ハイエナの巣窟ではないか」(エレ12:8以下)。彼はこの相続財産について次のように預言しています、「私の相続財産はハイエナの巣窟になったのか。ハイエナ——すなわち極めて荒々しい、死体を食い漁り、墓の周りにいて、死肉を食べるもの——の巣窟に。『私の相続財産は私にとってハイエナの巣窟ではないか。それとも、それ〔相続財産〕の周りにはそれに対する巣窟があるのか。行きなさい』(エレ12:9)」。彼らはそのようであったので、私はあなたがたが行って、獣たちを集め、彼らを獣たちに引き渡すことを、あなたがた天使に命じる。『行きなさい、野の獣たちをすべて集めなさい、彼らがそれを食べるように来させなさい』(エレ12:9)」と。野の獣が来て、かの民を食べました。彼らの心が敵対する諸力によって食べられているのを見てください。もしイエスが彼らを惜しまず、むしろ「行きなさい、獣たちを集めなさい」と言ったとすると、彼は私たちをどれほどより多く惜しまないことでしょうか。もし私たちが神の律法、福音の言葉を行わないなら、彼は再び、「行きなさい、獣たちを集めなさい、そしてそれを引き渡しなさい」と言うでしょう。しかし私たち自身は大胆さを持っているので、祈りにおいて、「あなたを認める魂を獣たちに与えないでください」(詩73 [74]:19)と言うでしょう。堕落について悔い改めながら認めましょう。また私たちが獣たちにではなく、養育してくれる聖なる天使たちに引き渡されますように。彼ら〔天使たち〕は私たちを胸に抱きかかえ、この世から、来るべき世に移してくれるでしょう、キリスト・イエス——「この御方に支配と栄光が永遠にある」(Ⅰペト 4:11)——において。アーメン。

ん。今日まで森の中には獅子たちがいて、主イエスを呪っており、彼を中傷しており、また彼の名を信じる者たちを待ち伏せしています。「私の相続財産は私に対して森の中の獅子のようになった。それは私に対してその声を届け、このことゆえに私はそれを憎んだ。私の相続財産は私にとってハイエナの巣窟ではないか」(エレ12:8以下)。彼はこの相続財産について次のように預言しています、「それがハイエナ——すなわち荒々しく凶暴で、いつも墓と骨の上でうずくまっている、死人の屍を常食とする獣——の巣窟となるであろうと預言しています。『私の相続財産は私にとってハイエナの巣窟ではないか。それとも、それ〔相続財産〕の周りには巣窟があるのか』(エレ12:9)」。彼らはそのようであったので、私はあなたがたが行って、獣たちを集め、〔彼らが〕引き裂かれるように彼らを引き渡すことを、あなたがた天使に命じる。『行きなさい、野の獣たちをすべて集めなさい、彼らに来させなさい、そして彼らが彼らを食べさせなさい』(エレ12:9)」と。野の獣が来て、ユダヤ人たちの民を食べました。すべての者たちの心が敵対する諸力によって食べられているのを見てください。もし神が彼らを惜しまず、むしろ「行きなさい、獣たちを集めなさい」と言ったとすると、彼は私たちをどれほどより多く惜しまないことでしょうか。もし私たちが彼の律法を行わなかったなら、もし私たちが福音の言葉を顧みなかったなら、彼は再び、「行きなさい、獣たちを集めなさい、そしてそれを引き渡しなさい」と言うでしょう。しかし私たち自身は主を信じており、また祈りにおいて、「あなたを認める魂を獣たちに与えないでください」(詩73 [74]:19)と言うでしょう。私たちの罪について悔い改めましょう、私たちが犯した過失を認めましょう、また私たちが獣たちに引き渡されないようにしましょう。いやむしろ、それよりも、天使たちがやって来るでしょう。彼ら〔天使たち〕は私たちをその胸に抱きかかえ、地の場所から、天の場所に移してくれるでしょう。

そして彼らが現在の時代から途切れない永遠へと〔私たちを〕置きますように、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠にある」(I ペト 4:11)——において。アーメン。

第11説教(エレ12:11-13; 13:1-11) = ラテン語訳の第7説教

解説

第11説教は、エレ12:11-13および13:1-11を題材とした中編である(全6節)。第1節では、「私のゆえに、地はすべて消滅によって消滅した」と言ったのが実はイエスだったと述べられる。第2節では、地を消滅させるためにイエスがもたらした「剣」とは、彼の教えのことだと説明される。第3節では、「小麦を蒔く」ことや「茨を刈る」ことに基づく異端者への批判、そして「割り当て地」と「利益」の解釈などが論じられる。第4節では、「自慢」についての考察と、恥じなくてもよい「自慢」の例として、パウロ書簡の一節が紹介される。第5節では、「亜麻布の帯」の解釈が説明され、またそれを巻く腰から上の部分が価値の高い「琥珀」に、腰から下の部分が生殖への罰である「火」に喩えられる。第6節では、帯の素材である亜麻布が「地」に起源を持っていること、そして神はユダヤ人という古い帯を脱いで「諸民族の教会」という新しい帯を織ったことが説明された後、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

「私のゆえに、地はすべて消滅によって消滅した」について。「帯」まで。

第1節

(ギリシア語)

「私のゆえに、地はすべて消滅によって消滅した」(エレ12:11)と言うのは誰でしょうか。キリストがこのことを言っています。彼の臨在の前に多くの罪が民に生じましたが、しかしそれは彼らが皆見捨てられ、永い間捕囚へと引き渡されるというほどではありませんでした。しかし、彼らが自分たちの父祖たちの升目を満たしたとき(マタ23:32参照)、また彼らが預言者たちを殺し、かつ義人たちを迫害し(マタ5:12, 23:37参照)、「神のキリストを」(ルカ9:20)殺し続けていたとき、そのときに、「あなたたちの家はあなたたちから捨てられた」(マタ23:38)ということが起こりました。そして彼のゆえに、

(ラテン語訳)

「私のゆえに、地はすべて消滅によって消滅した」(エレ12:11)と言うのは誰でしょうか。キリストがこのことを言っています。というのも、彼の来臨の前に多くの罪が確かにイスラエルの民にありましたが、しかし主がやって来て、彼らが完全に見捨てられ、永い間捕囚へと引き渡されるように、それらのことを禁じました。しかし、彼らが自分たちの父祖たちの升目を満たしたとき(マタ23:32参照)、また彼らが預言者たちの殺しに、義人たちの迫害に(マタ5:12, 23:37参照)、そして救い主の殺害に加わったとき、そのときに、「あなたたちの家は、見放されたものとして、あなたたちから捨てられるだろ

彼らはこれらのことを経験し、「地はすべて消滅によって消滅した」のです。

第2節

(ギリシア語)

もし人が非常に高い意味でも、「私のゆえに、地はすべて消滅によって消滅した」(エレ12:11)と聞くことを欲するなら、イエスが来たときにあなたの土地はある意味で消滅したということを見てください。というのも、地上の一員たちが殺されたときに(コロ3:5参照)、それは消滅したのです。また地はもはや自らのことのために働かず、もはや肉が花開いたような肉のわざは義人には生じず、もはや淫行もなく、もはや汚れもなく、放蕩もなく、偶像崇拜もなく、魔術やその他のものもありません(ガラ5:19以下参照)。しかし救い主は、「私が来たのは地上に平和をもたすためだ、となぜあなたがたは思うのか。平和ではなく、剣をもたすために私は来たのだ」(マタ10:34、エレ12:12も参照)と言っています。というのも、本当に、彼が来る前には、剣は地上になく、肉は霊に反して望まず、霊は肉に反して望みませんでした。しかし、彼が来たとき、また肉とは何か、霊とは何かを私たちが教えられたとき、その教えは地上における剣のようになり、肉と地を霊から分けたのです(ヘブ4:12参照)。そして地は消滅しました、私たちが肉におけるイエスの死を持ち歩いていたときに(Ⅱコリ4:10参照)。しかし、私たちはもはや肉に従って生きることはありません。ところが、霊が生きていて(ロマ8:13参照)、私たちは肉には何も蒔かず、霊にすべてを蒔くのです。それは、私たちが肉から滅びを刈り取るのではなく、霊から永遠の命を刈り取るためです(ガラ6:8参照)。

う」(マタ23:38)ということが果たされました。そして彼はこれらのことから、福音書に書かれているさまざまなことを経験したので、それゆえに今や「地はすべて消滅によって消滅した」と言われているのです。

(ラテン語訳)

もしあなたがより巧妙に、「私のゆえに、地はすべて消滅によって消滅した」(エレ12:11)の一節を理解することを欲するなら、あなたの中にあるそれを、どのように地が消滅したのかを、よく見てください。そしてそのときに、イエス・キリストの来臨の後に、言われたことが成就したことを見てください。地上の私たちの一員たちが殺されたならば(コロ3:5参照)、今や地が自らの仕事を行わないときに、「また」かつて肉がそれによって育まれていたようなものが義人のもとにあるときに、淫行はなく、汚れもなく、姦淫の放蕩もなく、偶像への従属もなく、魔術もありません(ガラ5:19以下参照)。主は、「私が来たのは地上に平和をもたすためだ、となぜあなたがたは思うのか。平和ではなく、剣をもたすために私は来たのだ」(マタ10:34、エレ12:12も参照)と言っています。本当に、彼が降りてくる前には、剣は地上になく、肉は霊に反して望まず、霊は肉に反して望みませんでした。しかし、彼が来たとき、また肉とは何か、霊とは何かを私たちが教えられたとき、彼の教えもまた、剣のように差し込まれ、肉を、すなわち地を、霊から分け、また追い出したのです(ヘブ4:12参照)。なぜなら、私たちはイエスの死を、私たちの肉において持ち歩いているからです(Ⅱコリ4:10参照)。しかし、私たちはこれ以上肉に従って生きることはなく、霊が生きています(ロマ8:13参照)。そして私たちは肉には何も蒔かず、霊に蒔くのです。それは、私たちが肉から滅びを刈り取るのではなく、霊から永遠の命を刈り取るためです(ガラ6:8参照)。

第3節

(ギリシア語)

しかし、罪人たちには「小麦を蒔きなさい、そして茨を刈り取りなさい」(エレ12:13)とされています。というのも、たとえ彼らが神の言葉に親しんでいるとしても、それらによく親しんでいない者たち——必要とされるようなやり方で生きることもなく、信じることもない者たち——は、小麦を蒔き、そして茨を刈り取るのです。しかし、これらのことは、とりわけ異端者たちについてだと理解されることができません。彼らは聖書を読みますが、聖書からではなく、自分自身の考えから茨を刈り取っているのです。「彼らの割り当て地は彼らの利益にならないだろう」(エレ12:13)。これらのことを、私たちより前にも他の者たちが論じました。そして私たちは彼らの議論を否定しているわけではないので、私たちはそれを、感謝を込めて真ん中に持っていくます、私たちが自分自身でそれを見出したわけではなく、むしろそれを良い教えとして学んだわけですから。この言葉はあなたがたの利益にも私たちの利益にもなるでしょう、もし私たちが書かれていることに注意するなら。私たちが考えているところでは、私たちのある者たちが、割り当て地のゆえにあなたがたを取り仕切っており、その結果、ある者たちはこの割り当て地に来ることを欲しているのです。しかし、その割り当て地がいつでも救ってくれるわけではないと知ってください。というのも、多くの長老たちでさえ追い払われ、〔逆に〕多くの平信徒たちでさえ幸福であると立証されるからです。したがって、割り当て地におけるある者たちが、割り当て地から利益を得たり、それを称えたりするような生き方をしないので、そのことゆえに、注解者たち曰く、「彼らの割り当て地は彼らの利益にならないだろう」(エレ12:13)と書かれているのです。というのも、利益になることとは、長老連の中で席を得ることと同じではなく、むしろ御言葉が求めるとおりに、席に相応しく生きることだからです。

(ラテン語訳)

しかし、罪人たちには「小麦を蒔きなさい、そして茨を刈り取りなさい」(エレ12:13)とされています。というのも、聖書の意志にも従わず、信仰の真理にも従わずに、神の雄弁を述べる者が、小麦を蒔き、そして茨を刈り取るからです。このことをするのは異端者たちです。彼らは聖書を読みますが、聖なる書物からではなく、自分自身の考えから茨から刈り取っているのです。「彼らの割り当て地は彼らの利益にならないだろう」(エレ12:13)。これらのことを、私より前に他の者たちが論じました。そして私は彼らの議論を否定しているわけではないので、私は同意しつつ、同じことを述べます、あたかも私が自分自身でそれを見出したわけではなく、すでに見出されたものを繰り返すことで〔見出した〕かのように。その結果、それは私にもあなたがたにも等しく役に立つのです、もし熱心な精神が、諸々の言われるべきことを受け入れるなら。私たちは何者かであると考えられているのですが、すなわち、より下の階級の誰かがこの地位になるのを望むほどまでに、私たちは聖職者の位階においてあなたがたを監督するのですが、あなたがたは、私たちが聖職者であるからといって、直ちに救われるわけではないと知るべきです。というのも、多くの長老たちでさえ消え去り、〔逆に〕平信徒たちは非常に幸福であると認められるからです。しかし、もし私たちもまた等しく聖職者の地位に値するなら、私たちもまた〔それを〕持つでしょう。したがって、聖職者たちのある者たちは、自分自身もまた地位から果実を得たり、自分自身の名誉のための飾りになったりするような生き方をしないので、そのことゆえに、預言者のことを説明した者たちは今や、「彼らの聖職者たちは彼らの利益にならないだろう」(エレ12:13)と言っているのです。というのも、聖職者の利益とは、誰かが長老連の中で席を得るかどうかではなく、むしろ自分自身の場所に従って、また主の命令

御言葉はあなたがたも私たちも善く生きることを求めています。しかし、もしこのように「力ある者たちは力あるようなやり方で試されるだろう」と言わなければならないなら、私自身は奉仕者よりも多くを求められ、奉仕者は平信徒よりも多くを求められますが、私たちすべての教会的な職務それ自体を任されている者は、さらにより多くを求められることになります。このことゆえに、大きなことを任されている者、使徒が次のように言うのを聞いてください、「このように、人は私たちのことを、キリストの侍者、そして神の秘儀の管理者と見なすべきである。あなたがたはこの場合、今や、管理者たちに求めなさい、〔そのうちの〕誰かが信実だと見なされるように」（Ⅰコリ 4:1以下）。しかし、このように管理者が信実かつ善と見なされることは稀です。イエス、「あらゆることをそれらの起源より前に知る方」（スザンナ42、ダニ13:42）は言っています、「一体、その主人が時に応じて自分の奴隷たちに食糧の分け前を与えるために、自分の家を管理させるために任命した、信実で思慮深い管理者とは誰か」（ルカ12:42、マタ24:45）。それから彼は幾人かの管理者たちを非難し、次のように言っています、「もし悪い僕が『私の主人は来るのが遅れる』と言い始め、自分の奴隷仲間や女奴隷たちを叩き、食べたり飲んだりし、また酔っ払い始めたら、その僕の主人は、僕が予期しない日、知らない時間に帰ってきて、彼を酷く罰し、信実でない者たちと同じ目に遭わせるだろう」（ルカ12:45以下、マタ24:48-51）。これらが、「彼らの割り当て地は彼らの利益にならないだろう」（エレ12:13）の一節についてです。

に従って相応しく歩むかどうかだからです。本当に、愛する方々よ、このことが私たちについてだけ言われていると考えてはいけません。神の威厳は、私たちが聖書の命令に従って生きるように、私たちにもあなたがたにも思い出させてくれています。しかし、もしこのように「力ある者たちは力あるようなやり方で耐えるだろう」と言うことが好都合であるのでしたら、助祭からよりも私から多くのことが求められ、平信徒からよりも助祭から多くのことが〔求められることになります〕。しかし、教会全体という要塞を治める者は、教会全体のために釈明することになるでしょう。このことゆえに、使徒パウロは——すなわち、多くのことが任された者として——次のように言っていました、「このように、人は私たちのことを、キリストの侍者、そして神の秘儀の管理者と見なすべきである。この場合、今や、管理者たちの間で、誰かが信実だと見なされなければなりません」（Ⅰコリ 4:1以下）。善い管理者を見つけることは、イエス、これから起ころうとしていたことが起こるより前に〔それを〕知る方が、次のように言うほどに稀です、「一体、その主人が時に応じて自分の奴隷たちに食糧を与えるために、自分の家族の上に任命した、信実で思慮深い管理者とは誰だと、あなたは思うか」（ルカ12:42、マタ24:45）。そしてわずかに後、幾人かの管理者たちについて非難した上で発言して曰く、「もし悪い僕が『私の主人は来るのが遅れる』と言い始め、奴隷仲間や女奴隷たちを叩き、食べたり飲んだりし、また酔っ払い始めたら、その僕の主人は、僕が予期しない日、知らない時間に来て、彼を〔二つに〕切り分け、彼の分け前を真実でない者たちに与えてしまう」（ルカ12:45以下、マタ24:48-51）。これらが、「彼らの聖職者たちは彼らの利益にならないだろう」（エレ12:13）と書かれている一節にあります。

第4節

(ギリシア語)

では、次に必要な叱責のことも見てみましょう。これを倫理的な範囲で取り上げるのは良いことです。それ〔叱責〕は、「恥じなさい、あなたがたの自慢を、主の前での非難を」(エレ12:13) と言っています。無分別ゆえに私たちが自慢する何らかのものがあありますが、それは自慢に値しないものでした。もし誰かが自分が裕福で多くのものを所有していることを自慢するなら、彼に対し「恥じなさい、あなたがたの自慢を」と言われるように、もし誰かが外側のことである生まれの良さについて自慢するなら、その者には「恥じなさい、あなたがたの自慢を」と言われるでしょう。もし誰かが服の贅沢さについて自慢するなら、〔もし誰かが〕贅沢に建造された家を建てることについて〔自慢するなら〕、それは聖なる者たちの自慢とは異なる自慢なのです。それゆえに、そのような者に対しては、「恥じなさい、あなたがたの自慢を」と言われるでしょう。知恵についてさえ自慢しないようにとあなた方に命じている、預言者エレミヤの言葉を聞いてください。というのも、彼はこう言っています、「自慢してはならない、知恵ある者は自分の知恵について、力ある者は自分の力について、富める者は自分の富について。そうではなく、自慢する者はこのことについて自慢しなさい。私こそが主であることを理解し、知っているということを」(エレ9:22以下)。あなたが自慢したいが、「恥じなさい、あなたがたの自慢を」と言われないうで自慢するためには、使徒のように自慢してください。彼曰く、「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架について以外に自慢することがあってはいけない。この方を通して、世界は私に対して十字架につけられ、また私は世界に対して〔十字架につけられた〕」(ガラ6:14)。あなたが自慢したいが、「恥じなさい、あなたがたの自慢を」と言われないうためには、パウロが自慢しているのを聞いてください、そして学んでください、彼が「した

(ラテン語訳)

では、次に他の者たちにとっても必要な叱責のことも見てみましょう。私に思われるところでは、これを倫理的な範囲で私たちは受け取らなければなりません。「惑わされなさい、あなたがたの自慢から、主の視界での非難から」(エレ12:13)。自慢することで、私たちが私たちの愚かさを見せるような多くのものがあります。たとえば、もし誰かが多くの所有物について自慢するなら、彼は彼らに対し「惑わされなさい、あなたがたの自慢から」と言います。もし誰かが生まれの良さについて自慢するなら、彼らに対し「惑わされなさい、あなたがたの自慢から」と言われます。もし誰かが非常に高価な服について自慢しながら歩いているなら、〔もし誰かが〕多くの富によって飾られた家について〔自慢しながら歩いているなら〕、それは確かに聖なる者たちの自慢とは異なる自慢なのです。そのような者たちに対しては、「惑わされなさい、あなたがたの自慢から」と言われます。しかし、これでは不十分です。エレミヤにおいて神の言葉が何を言うかを聞いてください。それは、私たちが私たちの知恵についてさえ自慢しないようにと命じています。彼はこう言っています、「自慢してはならない、知恵ある者は自分の知恵について、力ある者は自分の力について、富める者は自分の富について。そうではなく、自慢する者はこのことについて自慢しなさい。私こそが主であることを理解し、知っているということを」(エレ9:22以下)。あなたが自慢したいが、「惑わされなさい、あなたがたの自慢から」と言われないうで自慢するためには、使徒パウロのように自慢してください、そして言うてください、「しかし私には、我が主イエス・キリストの十字架について以外に自慢することがあってはいけない。この方を通して、世界は私に対して十字架につけられ、また私は世界に対して〔十字架につけられた〕」(ガラ6:14)。あなたが自慢したいが、「惑わされなさい、あなたがたの自

がって大いに喜んで私の弱さについて私は自慢しよう、キリストの力が私に宿るように」(Ⅱコリ12:9)と言うときに。彼が自慢する自慢を聞いてください、「甚だしく労苦の中で」、私たちのうちの誰がこんなことを言うことができるでしょう、「非常に多く牢獄の中で、頻繁に死の中で。私はユダヤ人たちによって、40にひとつ足りない〔鞭打ちを〕五度受け、三度杖で打たれ、一度石打ちをされ、三度難破した」(Ⅱコリ11:23-25)。したがって、私たちは学んでいます、さまざまな自慢の違いがあることを、ある自慢が恥に値することを。これらのことについて、かの使徒的なもの〔言葉〕は、「そして栄光は彼らの恥に」(フィリ 3:19)と言われ得るでしょう。彼らが恥じなければならなかった諸々のことについて、それらのことについて、栄光が与えられるだろうと彼らは思っているのです。

第5節

(ギリシア語)

これらのこのの後で、帯について見てみましょう。というのも、「次のことを主は言っている、『行って、自分のために亜麻布の帯を買いなさい、そしてあなたの腰の周りにそれを着けなさい、そしてそれを水に通してはくならない』。そこで私は主の言葉どおりに帯を買い、自分の腰の周りにそれを着けた。そして主の言葉が私に生じ、言った、『あなたの腰の周りにある帯を取り、立ち上がり、ユーフラテスに行きなさい、そしてそこでそれを岩の裂け目に隠しなさい』と」(エレ13:1-4)。日々の後、彼はそこへ行き、その帯が腐っているのを見つけます。すると主は、帯の解釈の手段を与えるものをもたらし、言いました、『帯が人の腰の周りにくつつくように、私はイスラエルの家とユダの家すべてを自分自身にくつつけた』、と主は言っている、『それは彼らが私にとって重要な民となり、自慢となり、栄光となるためだったが、彼らは私に聞き従わなかった』(エレ13:11)。したがって、

慢から」と言われたいためには、パウロが自慢しているのを聞いてください、そして学んでください、彼がなぜ「喜んで私の弱さについて私は自慢しよう、キリストの力が私に宿るように」(Ⅱコリ12:9) と言うのかを。人が自慢するのはどんな自慢なのかを聞いてください、「甚だしく労苦の中で」、誰がこんなことを言うことができるでしょう、「非常に多く牢獄の中で、頻繁に死の中で。私はユダヤ人たちによって、40にひとつ足りない〔鞭打ちを〕五度受け、三度杖で打たれ、一度石打ちをされ、三度難破した」(Ⅱコリ11:23-25)。私たちは学んでいます、さまざまな自慢の違いを、そして赤恥に値することについて自慢する者たち——彼らの「栄光は当惑の中に」(フィリ 3:19)——が少なからずいることを。というのも、これらの諸々のことについて彼らは自慢しており、そうするときに、彼らは隠れ場所や秘密の場所を探し求めます。

(ラテン語訳)

これらのこのの後で、帯について何が命じられているか考えてみましょう。「次のことを主は言っている、『見て、自分のために亜麻布の帯を受け取りなさい、そしてあなたの腰の周りにそれを着けなさい、そしてあなたは水を通り過ぎてはならない』。そこで私は主の言葉どおりに帯を受け取った、〔その言葉は〕私に向けて言った、『あなたの腰の周りにある帯を受け取り、ユーフラテスに行きなさい、そしてそれを岩の裂け目に隠しなさい』と」(エレ13:1-4)。日々の後、預言者は行って、その帯を、彼が埋めた場所から受け取りました。しかし見よ、それは腐っていました。それは誰にも使われることができません。そして誰にも、その者の精神の意志に従って、この箇所について自分自身で意味を推測させないように、主は解釈に機会を与えつつ、付け加えて言いました、「というのも、帯が人の腰の周りにくつつくように、私はイスラエルの家とユダの家すべてを私にくつつけた、

預言者は神の代わりに、彼の腰の周りに巻かれている亜麻布の帯を受け取りました、ちょうど神が民を「受け取った」ように。というのも、「私はこの民を自分自身にくっつけた」と彼は言っているからです。神は、あたかも神の民が帯となったかのように語っているのです。

では、何のために神の帯は彼の腰の周りにあるのでしょうか。エゼキエルを読むことができる者、また神が御言葉によってあたかも肉体をなしているかのようなものであるのを見ることができる者、そして一方ではどんな風に彼の腰から下が火であるか、他方では「どんな風に」腰から上も琥珀であるか「[を見ることができる者]」、そうした者は、なぜ神の下が火であるのか、理由を調べてください。腰と生殖からの行為、それこそが火なのです。というのも、生殖におけるあらゆるものは火による浄化を必要としており、生殖におけるあらゆるものは罰を必要としているからです。腰の上方にあり、生殖を越えたもの、それこそが世界で最も清浄で最も価値の高い物質です。というのも、琥珀は黄金よりも貴重であると言われているからです。したがって、聖書は、神の上方の体がより価値が高く、また下方の体がより劣っているということを教えるために、例を用いているので、このことゆえに、それは神を、火と琥珀から成り立ったものとして持ち出しました。そしてそれは神の体であり、また私たちのそれぞれ自身が、生殖における火なのです。私たちは琥珀ではありません、しかし、もし私たちが上に昇り、前進するなら——というのも、下方における今日の状態から移動することが可能なのです、上方の神の体になるために——、私たちは、火を過ぎたら、神のより高い体に属する琥珀となることでしょう。

第6節

(ギリシア語)

したがって、亜麻布の帯は彼の腰の周りに

それは彼らが私にとって重要な民となり、歡喜となり、栄光となるためだったが、彼らは私に聞き従わなかった』(エレ13:11)。したがって、預言者が神の代わりに受け取られるようにしてください、預言者は自分自身の腰の周りに亜麻布の帯を巻いています、すなわち神が民を「巻いているように」。というのも、「私はイスラエルの家を自分自身にくっつけた」と彼は言っているからです。いわば、義なる人は神の帯とされているのです。

どんな理由からなのか、あなたは尋ねるでしょう。エゼキエルを読んでください、そして理解してください、いかに神が肉において見られるか、またなぜ彼の腰から足まで火が現れるのか、そして「なぜ」腰から頭まで琥珀が「現れるのか」を。それからあなたは今の書の意味をも理解することができるでしょう、なぜ神のより低い部分が火であるのかを。腰部は生殖に、そして腰は火に関係付けられます。というのも、性交や快樂に由来するものすべては浄化を必要としており、その浄化そのものは罰と混ぜ合わされているからです。しかし、腰部からより上方に起こり、自らの徳によって欲望のわさを越えるものは、琥珀に似たもの、いわばより清浄な何らかの物質と言われます。というのも、琥珀は黄金よりも貴重であると言われているからです。では、聖書が、神の上方の体が偉大であり、また下方「の体」がより劣っているということを示すために用いている例は何でしょうか。このことゆえに、今やそれは主を、火と琥珀から存在するものとして持ち出しました。このことから、私たちのそれぞれは、自分自身の出生の始まりに基づいて、火に帰せられるのです。しかし、熱意と前進に基づいて、神の体はより上方のもの、琥珀からのものとされるのです、私たちの火から、罰から、拷問から離れることで。

(ラテン語訳)

したがって、亜麻布の帯をあなたの腰の周り

くつついています。何のためでしょうか。それは民があたかも神の覆いであることが明らかにされるためです。というのも、神を告発しようとする者たちに対して、民が立てられ、それはちょうど彼〔神〕を覆うかのようであり、神に関することについて何か場違いなことが言われることを許さないからです。私たちが罪を犯すや否や、預言者がこの帯を脱ぎ捨て、それをユーフラテス川へと有罪宣告した結果、そこでその帯が駄目になったのと同様に、罪人は神の腰から投げ捨てられ、また追い出された後、彼はユーフラテス川へと、メソポタミアの川へと追い出されます。そこにはイスラエルの敵であるアッシリア人たちが、そこにはバビロニア人たちがいて、そしてそこで彼は滅ぼされます。というのも、そのようないくつかの川がありますが、預言者は、仕事をするために、そして亜麻布の帯を取り去るために、ユダヤからユーフラテス川へと送られるのです。

しかし、何のために亜麻布でもあるのでしょうか。なぜなら、それは地から起源を持っているからです。というのも、それは地から生える植物で、それから耕された後、それは脱穀され、洗われ、洗い流され、そして多くの作業によって、帯やそのようなものになるというような状態になるのです。そして私たちこそは皆、起源を神の帯として持っています。そして、地から起源を持っているので、私たちは多大なる準備を必要とします、私たちが黄色くなるために、洗われるために、地の色を脱ぎ捨てるために。というのも、起源の亜麻布の色は別であり、作業からの色はまた別だからです。起源の亜麻布の色はより暗いですが、一方で作業からのそれはより光り輝くようになるのです。したがって、そのような何かが起源における私たちの上にもやってきます。私たちは信じることにおける始まりのときには暗くなり、それゆえに歌の中の歌の始めで、「私は黒くて美しい」(雅 1:5)と言われているのです。そして私たちこそは初めはエチオピア人の魂に似ていますが、それから

にくつつけてください。なぜでしょうか。それは民が、〔自分たちが〕神の王国であることが示されるためです。というのも、神の摂理を告発しようとする者たちに対して、民は抵抗し、自らの神のわざを覆うからです。民は彼の威厳について何か相応しくないことが言われるのを許さないからです。しかし、私たちが罪を犯すや否や、預言者がこの帯を脱ぎ捨て、それをユーフラテス川へと投げ捨てた結果、同じ場所でその帯が腐敗したのと同様に、神はその腰から私たちをもまた投げ捨て、追い出された私たちをメソポタミアのユーフラテス川へと置き去りにするでしょう。そこにはイスラエルの敵であるアッシリア人たちが、そこにはバビロニア人たちが住んでいて、そしてそこで私たちは腐敗するでしょう。というのも、それほど多くの川が全世界で無視されているにもかかわらず、なぜ預言者はユダヤからユーフラテスへと送られているのでしょうか、名前の力に従って秘跡としての理解を教えることなしに。

このことの後に、私たちはそれがなぜ亜麻布の帯と言われているのかを問います。亜麻布は地から生まれてきます。というのも、その種が地面に蒔かれたとき、それは最初に草の中に芽を出し、次に、数えきれないほどのことを私が通過するように、収穫された後に家へと運ばれ、櫛削られ、洗われ、脱穀され、打たれ、そしていわば多くの作業によって吟味されます。そうすることで、そこから帯が作られ得るような何かが、あるいは必需品に適合されるような何か別のものがもたらされるのです。そしてそれゆえに、起源を地から持っている私たちこそは皆、ちょうど神の帯のために櫛削られる亜麻布のように、大きな配慮を必要としています、櫛削られるために、洗われるために、地の色を脱ぎ捨てるために。というのも、亜麻布における起源の色は別であり、またそれが作業によって清められたとき〔の色は〕別だからです。起源の色はより暗く、またより黒いですが、一方で作業の〔色〕はより明るいのです。そのような何か

私たちは洗い清められます。それは私たちがより光り輝くようになるためです、「上ってきて白くされた彼女は誰だろう」(雅 8:5) という一節に従って。そして私たちは、光り輝く清浄な亜麻布になります(黙 15:6 参照)。それから、私たちは神の帯へと編まれるのです、私たちが神にくっつくに相応しくなるときに。神は私たちのことは脱ぎません。彼は最初の民、「ユダの家すべて」と「イスラエルの家」を脱いだのです(エレ 13:11)。それが起こったのは、「彼らが」もはや必要とされていないためです。というのも、彼はもはや彼らを締めないからです。私たちこそを、かの者たちの代わりに、神は締めました。というのも、彼は帯を脱ぎ捨てた後に、裸のままでいたのではなく、別の帯を自分自身のために織ったのです。この帯とは、諸民族からの教会のことです。その者は誰でも次のことを知らなければなりません。すなわち、もし神が最初の者たちを惜しまなかったとすれば、まして、彼は罪を犯す彼女をどれだけ惜しまないことでしょう(ロマ 11:21, 24 参照)、もし彼女が神の腰に相応しくないなら。「しかし、主にくっつく者は一つの霊となる」(Ⅰ コリ 6:17)、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠にある」(Ⅰ ペト 4:11)——において。アーメン。

が始まりにおいて生じます。というのも、私たちは黒いからです、私たちが再生させられるときには、私たちが信じるときには、私たちが歌の中の歌において「私は黒くて美しい」(雅 1:5) と言うときには、私たちはエチオピア人に似た恥ずべき魂を持っています。私たちは洗われて白くなり、本来は私たちに植え付けられていなかった輝きを、注意深く獲得することになるのです、「上ってきて白くされた彼女は誰だろう」(雅 8:5) という同じところに書かれている一節に従って。そして私たちは、白く、水のおかげで清浄な亜麻布になります(黙 15:6 参照)。それから、私たちが神の仲間に相応しくなったときに、私たちはその帯へと巻かれるのです。私たちはついに脱がれることはありません、ただし、もし彼〔神〕が私たちに認めた白さを、私たちが常に持っていればですが。それゆえに、ユダとイスラエルの家すべてが神に相応しくなくなり(エレ 13:11 参照)、しかし彼によって脱ぎ捨てられたので、彼はかの者たちの代わりに私たちで帯を締めました。というのも、帯を脱ぎ捨てた者がそれを身に着けたままだったと考えられるべきではないからです。彼はかの者たちを投げ捨てるや否や、別の者たちを自分自身のために織ったのです。この帯とは、諸民族から集められた教会のことです。それ〔教会〕には次のことを知る必要があります。すなわち、もし神がより以前の者たちを惜しまなかったとすれば、彼は自らを惜しまないことでしょう(ロマ 11:21, 24 参照)、もしそれ〔教会〕が彼を軽視したなら、もしそれが彼の腰に相応しくなかったら、もしそれが主にくっつく一つの霊とならなかったら(Ⅰ コリ 6:17 参照)、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠にある」(Ⅰ ペト 4:11)——において。アーメン。

第12説教（エレ13:12-17）＝ラテン語訳の第9説教

解説

第12説教は、エレ13:12-17を題材とした長編である（全13節）。第1節では、聖書を読み慣れていない者にとっては「愚か」に聞こえるかもしれないと断った上で、「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」という一節が取り上げられる。第2節では、「悪による罰」や「徳による祝福や約束」が、「混ぜ物をした葡萄酒」や「混ぜ物をしていない葡萄酒」の比喻で解釈される。第3節では、「神は義人たちを集めるが、罪人たちを追い散らす」という主題が論じられる。第4節では、悪人たちを「追い散らす」のは彼らの悪を弱めるためだと説明される。第5節では、罪人を「惜しまず、憐れまない」ような神が善であるわけがないという異端者たちからの攻撃に対し、「共通善」という観点から反論が展開される。第6節では、ある者たちの罰が他の者たちの救いにとって訳に立つことが論じられる。第7節では、新たな話題に移りつつ、「耳を傾けること」と「聞くこと」の違いや、「高ぶる」ことの害悪が説明される。第8節では、権力者や金持ちは言うまでもなく、賢者や禁欲者、さらにパウロでさえ、自らの賢さや努力や成功について「高ぶる」べきではないと述べられる。第9節では、神に栄光を与えるのは光があるときにすべきと主張される。第10節では、「昼」（現代）と「夜」（終末）のイメージの中で、「神の怒りが過ぎ去るまでほんの少しの間隠れなさい」という一節は、神にとっては「ほんの少しの間」のことだが、人間にとっては非常に長い時間であることが説明される。第11節では、神に与える栄光とは、有徳の行為によって与えられるものであることが論じられる。第12節では、「山々」のうち、明るいものは天使、預言者、使徒たちを、一方で暗いものは悪魔、支配者、悪霊たちを意味すると解釈された上で、暗い山々でも「光」を期待すべきことが述べられる。そして第13節では、「隠された方法で聞く」ことの意味が解釈され、またその方法で律法や預言書、さらには福音書を読む際の注意点が説明された後、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

「そしてあなたは〈この〉民に言いなさい。イスラエルの神、主はこのことを言う。すべての革袋は〈葡萄酒で〉満たされる」について。「あなたたちの目は涙にふさわしい。なぜなら主の群れが捕らえられるからだ」まで。

第1節

（ギリシア語）

預言者が言うように神から命じられたことは、神に相応しくなければならず、またそれは神に相応しくないようには見え[ません]、私たちが文字に留まるときには。その結果、誰か他の者は、文字を聞いたときに、次のように言いました、「これらの文章は愚かだ」と。しかし、このようなことを言うのは肉に属する人なのでしょ、というのも、「肉に属する人は神の霊に属する事柄を受け入れない。彼にとってそれは愚か

（ラテン語訳）

彼が言うように預言者に神から命じられたことは、神の支配に相応しくなければなりません。しかし、それは〔神に〕相応しくは見えません、もし私たちが文字に留まるなら、また私たちがより深く何かを問わないなら。それは、もし誰かが訓練されていない聞き手として現れたら、聖書に耳を合わせることや、その中で読まれることを知ることは愚かであると言ってしまふほ
どです。これは肉に属する人の言説なのです、

なことだからである」(I コリ 2:14)。したがって、本文が何と言っているのかを見てください。「そしてあなたはこの民に言いなさい。イスラエルの神、主はこのことを言う——〈「イスラエルの神、主が言う」ことが〉、イスラエルの神、主に相応しくあるように——『すべての革袋は葡萄酒で満たされる』と。するとそうなるだろう、もし彼らがあなたに対して『私たちは、すべての革袋が葡萄酒で満たされると知らないほど、知らないのだろうか』と言うなら」(エレ 13:12)。そして、〈もし〉答える者たちが、言葉に従ってこれらのことを述べ、また「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」と知っていたと言うなら、彼らは嘘を吐いているのです。というのも、「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」わけではないからです。少なくとも、オリーブ油で満たされた革袋、あるいは他の液体で「満たされた革袋」があります〈し、一方で、あるものは空っぽのままです〉。したがって、彼らは嘘を吐いているのです。というのも、「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」わけではないからです。そして民は答えて主張します、「私たちは、すべての革袋が葡萄酒で満たされると知らないほど、知らないのだろうか」と。まさしくこのことは、私たちの能力に従って、次のような説明をもたらすでしょう。もし私たちが葡萄酒の違いと、それらに関して言われていることを見るなら、従って、それらのことによっても、革袋に関して、私たちは「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」ことが本当たと知るでしょう。というのも、もし誰かが善い人であるなら——いわば革袋の中の革袋と呼んでみましょう——彼は自分自身の善さに従って葡萄酒で満たされることでしょう。またもし彼が——諸々の革袋の比較において、またそれらに関する判断において——邪悪な人であるなら、彼はその邪悪さに従って、邪悪な葡萄酒で満たされることでしょう。そもそも、葡萄酒の違いについて、聖書からどのように理解することができるでしょうか。より劣ったものについては、次のことが書かれ

というのも、「肉に属する人は神の霊に属する事柄を受け入れない。彼にとってそれは愚かなことだからである」(I コリ 2:14)。したがって、神の言葉が何と命じているのかを考えましょう。「そしてあなたはこの言葉を民に言うだろう。イスラエルの神、主はこのことを言う」。イスラエルの神、主が言うことが、どうかイスラエルの神、主に相応しくあるように。「すべての革袋は葡萄酒で満たされる。するとそうなるだろう、もし彼らがあなたに対して『私たちは、すべての革袋が葡萄酒で満たされると知らず、また知らないのだろうか』と言うなら」(エレ 13:12)。そして、もしこれらのことに答える者たちが、言葉だけに従い、また「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」と自らが知っていたと言うなら、彼らは欺かれているのです。というのも、「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」ことが必ず結果として起こるわけではないからです。オリーブ油で満たされた革袋があり、どこでも液体状の物質をまったく欠いた他のもがあり、あるいは確かに満たされていないものがあるのです。しかし、主はすべての革袋が葡萄酒で満たされるべきだと言いました。すると民は答えます、「私たちは、すべての革袋が葡萄酒で満たされると知らないほど、知らないのだろうか」と。これらのことは、確かに、私たちの才能の貧しさに従って、次のように解釈されることが可能です。もし私たちが先に葡萄酒の違いを見るなら、その結果、「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」と言われているのが信実であることを、そのとき私たちが結果的に取り上げるのです。というのも、もし誰かが善い人であるなら——いわば革袋の中の革袋と呼んでみましょう——彼は自分自身の善さという葡萄酒で満たされることでしょう。またもし彼が——それが悪いものであることに従って——悪い人であるなら、彼は悪い葡萄酒で満たされることでしょう。そもそも、私たちは葡萄酒の違いを、聖書からどのように理解することができるでしょうか。悪い葡萄酒については、次のことが書かれていま

ています、「というのも、彼らの葡萄はソドムの葡萄から、そして彼らの葡萄の枝はゴモラから。彼らの葡萄の房は苦さの葡萄の房、彼らにとって苦味の一房。彼らの葡萄酒は龍の怒り、不治なる虺の怒り」(申32:32以下)。一方で、より優れたものについては、「杯は最も強いものとして私を酔わせる」(詩22 [23]:5)、そして知恵は自らの酒混器に呼びかけて曰く、「来なさい、私のパンを食べなさい。そして私があなたがたのために混ぜた葡萄酒を飲みなさい」(箴9:5)。従って、ソダムからの葡萄酒があり、また知恵が混ぜる葡萄酒があるのです。そして再び、「愛する者には、肥沃な場所に、頂上に、葡萄園が生じた」(イザ5:1)。ソレクと呼ばれる葡萄は(イザ5:2参照)、神によって植えられたものであり、選ばれ、驚くべきものです。しかし、いわばエジプトの葡萄があり、それを神は次のように書かれていることに従って打つのです、「神は打った、彼らの葡萄を雹で、彼らの桑を霜で」(詩77 [78]:47)。

第2節

(ギリシア語)

したがって、今や比喩的にすべての人が葡萄酒を含むことができるのだと私たちと共に考えてください。そこで私は彼らのことを、このことに従って、革袋を呼び、次のように言います。すなわち、卑しい者はソドムの葡萄の葡萄酒で満たされ、エジプトの葡萄酒やイスラエルの敵たちの葡萄酒で満たされますが、聖者や、助けられた者は、ソレクの葡萄からの葡萄酒で満たされます。その葡萄酒について、「酔わせるあなたの杯は何と優れていることか」(詩22 [23]:5)と書かれています。そして、繰り返しになりますが、聖者は、知恵が混ぜた葡萄酒で満たされるのです。そこで、悪と徳に従って、これらのことを理解してください、「すべての革袋が葡萄酒で満たされる」ことが認められるように。しかし、もし悪によることと徳によること

す、「ソドムの葡萄園から、そしてゴモラから、彼らの葡萄の房は毒の葡萄の房。彼らにとって苦味の一房。彼らの葡萄酒は龍の毒薬。そして不治なるコブラの毒」(申32:32以下)。良い葡萄酒については、次のことが言われています、「酔わせるあなたの杯は何と輝かしいことでしょう」(詩22 [23]:5)、そして知恵は自らの酒混器に呼びかけて曰く、「来なさい、私のパンを食べなさい。そして私があなたがたのために混ぜた葡萄酒を飲みなさい」(箴9:5)。従って、ソダムからの葡萄酒があり、また知恵が混ぜるもの葡萄酒があるのです。そして再び、「愛する者には、頂上[角]に、肥沃な場所に、葡萄園が生じた」(イザ5:1)。それは神によって植えられたものであり、ソレクの葡萄園と呼ばれており(イザ5:2参照)、いわばすべての葡萄園の中から選ばれた、そして驚くべきものです。しかし、いわばエジプトの別の葡萄園があり、それを神は次のように書かれていることに従って打つのです、「彼は打った、彼らの葡萄園を雹で、彼らの無花果を寒さで」(詩77 [78]:47)。

(ラテン語訳)

したがって、比喩的にすべての人が葡萄酒の収容力があるのだと考えましょう。私たちは彼らに、葡萄酒の収容力があるもの以外に、革袋以外に、他の名前を与えることはできません。そして放埒な者はソダムとエジプトの葡萄畑からの葡萄酒で満たされ、イスラエルの敵たちの葡萄酒で満たされていると言うこと「ができます」。しかし、聖者や、徳によって進む者は、ソレクの葡萄畑からの葡萄酒で満たされます。その葡萄酒について、「酔わせるあなたの杯は何と優れていることか」(詩22 [23]:5)と書かれています。その葡萄酒は知恵が混ぜたものです。そこで、放埒さと徳に従って、これらのことが確かにそこで理解されますように。いかにすべての革袋が葡萄酒で満たされることになるか理解しましょう。しかし、もし革袋が放埒さか徳

— [すなわち、] 悪による罰と、徳による祝福や約束 — を見なければならぬなら、聖なる書物から、どのようにして罰や約束が葡萄酒として述べられるのかを示しましょう、「この混ぜ物をしていない葡萄酒の杯を取りなさい。そして、私自身がそこにあなたを遣わすすべての諸民族に「それを」与えなさい」。エレミヤはこのようにも言っており、それに付け加えて「次のように述べています」、「そして彼らは飲み、吐き、狂い、落ちるだろう」（エレ32 [25]:16）。したがって、彼はここで罰を、混ぜ物をしていない葡萄酒と呼びました。これ「葡萄酒」を、混ぜ物をしていない葡萄酒に相応しい者たち、すなわち混ぜ物をしていない罰に相応しい者たちが飲むのです。しかし、純粹ではなく、むしろ混ぜ物をされた罰を飲む別の者たちもいます。というのも、「主の手の中には、混ぜ物をしていない葡萄酒の混ぜ物で満ちた杯が「あり」、〈そして〉彼はこれからこれへと注いだ。しかし、その澀が飲み干されることはないが、地のすべての罪人たちは飲むのである」（詩74 [75]:9）。もしあなたが義人たちの飲む「祝福の杯」（Ⅰコリ10:16）をも知りたいなら、「私があなたがたのために混ぜた葡萄酒を飲みなさい」（箴9:5）と言っていた知恵のもの「箴言」でも十分ですが、しかし、私と一緒に、「大いに席が整った」、そして装飾された「二階の広間」（マコ14:15、ルカ22:12）へと上る、過越祭のときの救い主をも見てください。彼は弟子たちと共に祭りを祝い、彼らに杯を与えています。それについて、彼が混ぜたとは書かれていません。というのも、イエスは、混ぜ物をしていないもので弟子たちを喜ばせつつ喜ばせており、彼らに次のように言っています、「取りなさい、飲みなさい、これは私の血、あなたがたのために流された罪の赦しのためのものである。あなたがたが飲むたびに、私の記念のために、これを行いなさい」（マタ26:27以下、ルカ22:20）。すると、「アーメン、私はあなたがたに言うておく、神の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後これを

で満たされるなら、それらは放埒さゆえに罰に、また徳ゆえに祝福に満たされることになるでしょう。聖なる書物に、どのようにして拷問あるいは約束が葡萄酒と呼ばれるのかを、証拠を示してもらいましょう、「この混ぜ物をしていない葡萄酒の杯を取りなさい。そして私があなたを遣わすすべての諸民族に「それを」飲ませなさい」。エレミヤはこのように言っており、それに付け加えて「次のように」述べています、「そして彼らは飲み、来て、狂い、落ちるだろう」（エレ32 [25]:16）。したがって、彼はこの箇所で罰を、混ぜ物をしていない葡萄酒と呼びました。ある者たちが混ぜ物をしていない葡萄酒を飲むのです、すなわち、混ぜ物をしていない十字架に相応しい者たちが。しかし、別の者たちは罰を、すなわちまったく完全に純粹ではなく、むしろ部分的に混ぜ物をされた葡萄酒を飲むのです。というのも、「主の手の中には、混ぜ物をしていない葡萄酒の混ぜ物で満ちた杯が「あり」、そして彼はこれからこれへと注いだ。しかし、見よ、その澀が空になることはないが、地のすべての罪人たちはそれから飲むのである」（詩74 [75]:9）。もしあなたが義人たちの飲む「祝福の杯」（Ⅰコリ10:16）に関心を持ちたいなら、知恵の証言で間に合わせることができます、そこでは「私があなたがたのために混ぜた葡萄酒を飲みなさい」（箴9:5）とそれは言っています。しかし、過越祭のときに、「席が整った」、そして装飾された大きな「二階の広間」（マコ14:15、ルカ22:12）へと上る救い主を見てください。彼は自分の弟子たちと共に祭りの日を行い、その杯を彼らと乾杯しています。それについて、福音書では、彼がそれを混ぜ、またそのようにして渡したとされています。というのも、イエスは、弟子たちを喜ばせているときに、彼らに混ぜ物をしていない盃で乾杯し、言いました、「取りなさい、飲みなさい、これは私の血、あなたがたのために流された罪の赦しのためのものである。あなたがたが飲むたびに、私の記念のために、これを行いなさい」（マタ

飲むことは決してない」(マタ26:29)。

あなたはその杯を、新しい契約の約束であると見なします(Ⅰコリ11:25)、混ぜ物をしていない葡萄酒の杯を、罰だと見なします。そして混ぜ物をされた杯を、罰の別のかたちだと「見なします」。その結果、悪い行いと混ぜ合わされた有益な行いの価値に基づいて、飲むものはそれぞれの人によって混ぜられることになるのです。しかし、あらゆる意味で神への敬虔さを知らぬ者たち、そして自らに全く心を向けず、むしろいわば偶然に生きている者たちが、混ぜ物をしていない葡萄酒を飲んでいること——そのことについて、私はエレミヤからの一節を示しました——に、私と共に気づいてください。一方で、あらゆる意味で背教者でも罪人でもありませんが、新しい契約の杯に相応しくなく、い者たちが、あるときは極めて有益なことをし、またあるときは真逆の〈行い〉をし、「混ぜ物をしていない混ぜ物」の葡萄酒を飲んでいることに「気づいてください」。というのも、神は「これからこれへと注いだ」(詩74 [75]:9)からです。「これ」とは何か。二つの杯を私は見えています、というのも、「彼はこれからこれへと注いだ。しかし、その澀が飲み干されることはない」(詩74 [75]:9) と言われているのに従って。あなたの善い行いの杯が神の一つの手にあることに、私と共に気づいてください。しかし、もし私がより大胆に言うことをあなたが望むなら、神の右手にあなたの善い行いの杯がありますように。それから、あなたの罪の杯が神の左手にありますように。したがって、あなたが罪ゆえに罰せられようとしているときには、より有益な行いもまたあなたに生じるのですから、「主の手の中の杯」は「混ぜ物をしていない葡萄酒の混ぜ物で満ちて」おり、「そして彼はこれからこれへと注いだ」のです(詩74 [75]:9)、「すなわち」左の「杯」から右の「杯」へ。というのも、あなたは善いことの杯だけを飲むことができるわけではありません、善い行いだけをしたわけではないのですから。またあなたは罪の杯

26:27以下、ルカ22:20)。すると、「アーメン、私はあなたがたに言うておく、神の国であなたがたと共に新たにこれを飲むその日まで、今後これを飲むことは決してない」(マタ26:29)。

あなたは新しい契約という杯を見るでしょうか(Ⅰコリ11:25)。あなたは、私たちが上述した罰の杯が、混ぜ物をしていない葡萄酒で満ちていることを見るでしょうか。別の杯もあります、善い行いあるいは悪い「行い」の釣り合いのために、あなたがたのために、混ぜ合わされ、伝えられている「杯が」。というのも、完全に敬虔さから離れる者たち、そしてあらゆる点で宗教に敵対する者たち——彼らは偶然に、そして獣たちのやり方で生きているほどである——が、混ぜ物をしていない葡萄酒の杯を飲んでいること——そのことを、私はエレミヤの書から示しました——を、私と共に理解してください。一方で、完全に「敬虔さから」離れたわけではない者たちについては、むしろ——罪人であり、新しい契約の杯に相応しくないと思なされており、またあるときは善い行いをし、またあるときは真逆「の行い」をしているので——混ぜ物をしていない葡萄酒に混ぜられた杯を飲んでいることを「理解してください」。というのも、神は「これからこれへと注いだ」(詩74 [75]:9)からです。「これからこれへ」と彼が言うのはなぜでしょうか。二つの盃を私は見えています。「彼はこれからこれへと注いだ。しかし、その澀が空になることはない」(詩74 [75]:9)。あなたの善い行いの杯が神の一つの手にあることに、注意を向けてください。しかし、もし私がより大胆に言うことをあなたが許すなら、彼の右手に徳の杯がありますように、左手に悪徳の「杯」がありますように。したがって、あなたが罪ゆえに責め苛まれはじめるときには、善い行いもまたあなたはしたのですから、「主の手の中の杯」は「混ぜ物をしていない葡萄酒の混ぜ物で満ちて」おり、「そして彼はこれからこれへと注いだ」のです(詩74 [75]:9)、「すなわち右にあったもの「杯」から左に保持されていたもの

だけを飲むことができるわけでもありません、なぜなら何らかの有益なことがあなたによって行われたのですから。このことゆえに、彼はこれからこれへと注いだのです。あなたの行いに比例して、怒りと罰があなたのために混ぜ合わされます、その結果、罰の杯はあなたにとって、あるいはより水っぽいものとなり、またあるいはより苦く、より痛いものとなるでしょう。というも、すでに述べたように、罪が善い〔行い〕に組み合わせられるに比例して、諸々の罪のそれぞれに相応しく与えられた怒りの杯からの〈苦悩〉は、何らかの方法で和らげられたり、和らげられなかったりするからです。しかし、もしあなたが全体として美しくかつ善いならば、あなたは「私は救いの杯を取り、主の名を呼ぶだろう」(詩115:4 [116:13])とすることでしょう。従って、「すべての革袋」は、美しいものであれ悪いものであれ、「葡萄酒で満たされる」(エレ13:12)でしょうし、そして革袋の適性に従って、ここで革袋と呼ばれている言葉に従って、葡萄酒が革袋に注がれるでしょう。従って、オリーブ油も他の何らかの水分を含んだ物質も革袋に注がれることはなく、すべての革袋は葡萄酒で満たされなければなりません。

第3節

(ギリシア語)

それから彼は、言葉通りである限り、エルサレムと、それからユダヤにおいて罪を犯した者たちを通して教えています、神がどんな葡萄酒でこれらの革袋を、〔すなわち〕罪人たちを満たそうとしているのかを。というも、次のように書かれています、「もし彼らがあなたに対して『私たちは、すべての革袋が葡萄酒で満たされると知らないほど、知らないのだろうか』と言うなら、あなたは彼らに対して言うでしょう、『主はこう言っています、見よ、私こそは、この地に住む者たち全員を、王たちを、ダビデの王座に座る彼の息子たちを、祭司たちを満たす』と」(エレ13:12以下)。罰しようとしている御方は

〔杯〕へ。というも、あなたは善いことの杯だけを飲むことができるわけでもありません、あなたも善いことだけをしたかのように。他方で、〔あなたは〕罪の〔杯〕だけ〔を飲むことができるわけ〕ではありません、なぜならあなたは善いこともときに行ったからです。このことゆえに、彼はこれからこれへと注いだのです。その結果、あなたの行いの釣り合いに従って、罰があなたのために混ぜ合わされます、より水で薄めたものにせよ、あるいはより混ぜ物をしていないものにせよ。そしてあなたの相応しさに従って、神の怒りの棘は、あるいは鈍らせられたり、あるいは鋭くされたりするのです。しかし、もしあなたが善かったならば、また神の命令を守って来たならば、あなたがなぜ「私は救いの杯を取り、主の名を呼ぶだろう」(詩115:4 [116:13])と言うのかに気を付けてください。従って、「すべての革袋」は、善いものであれ悪いものであれ、自分の特性という葡萄酒で満たされるでしょう。オリーブ油も他の何らかの液体もそれに注がれることはありません、それがソドムあるいはソレクのものでないなら。

(ラテン語訳)

それから彼は、その間に、私たちが言葉に従う限り、エルサレムにおいて罪を犯した者たちと、ユダヤに当時住んでいた者たちを通して教えています、どんな葡萄酒でこれらの革袋が満たされるべきかを。というも、次のように続きます、「もし彼らがあなたに対して『私たちは、すべての革袋が葡萄酒で満たされると知らないほど、知らないのだろうか』と言うなら、あなたは彼らに対して言うでしょう、『主はこう言っています、見よ、私こそは、この地に住む者たち全員を、王たちを、ダビデの王座の上に座る彼の息子たちを、祭司たちを酔いで満たす』と」(エレ13:12以下)。罪人たちを罰しようと

誰も惜しむことはありません。誰かが預言者とは呼ばれないが罪を持っているとき、その者は、言われている強い要求で満たされることはないでしょう。誰かが祭司とは呼ばれないが、民のもとでより尊敬されるような名前の優越さを持っていると思ったとき、神は彼を惜しみ、その結果、彼が罪を犯しても罰されることはないのです。しかし、彼らについて記録されていることは、使徒曰く、私たちのために、「[すなわち] 世の終わりが降りてきた者たちに向けて書かれた」(Ⅰコリ10:11) といひます。したがって、もしこれらの祭司たち——私は私たちの司祭たちのことを指しています——のうちの誰かが、あるいは民の周りに立つこれらのレビ人たち——私は助祭たちのことを言っています——のうちの「誰か」が罪を犯すなら、その者はこの罰を持つでしょう。繰り返しになりますが、何らかの祭司的な祝福があるわけですが、それについて、神が許すなら、ずっと後ではなく、むしろ預言の言葉の検証の後に、民数記を読みながら私たちは知ることになるでしょう。というのも、祭司たちについては、まさにそこで何らかのことが述べられようとしているからです。

したがって、「祭司たち、預言者たち、ユダ、そしてエルサレムに住むすべての者たちを」、主は「酔いで」満たすと言っており、「また男やその兄弟を、そして彼らの父たち〈や彼らの息子たち〉を追い散らす」(エレ13:13以下) [と言っています]。そしてこれらのことを次のように理解しましょう。[すなわち] 神は義人たちを集めるが、罪人たちを追い散らすのだ、と。このことゆえにまた、人々が東から移されなかったときにはいつでも、神は彼らを追い散らすことはありませんでした。しかし、彼らが「東から」(創11:2) 移り、「また人がその隣人に、『さあ、私たち自身のために、町と塔を築こう、その頂きが天までになるような』と言った」(創11:3以下) ときには、神はこれらのことについて「次のように」言っています、「さあ、私たちは降って行って、そこで彼らの言語を混乱させよう」

している御方は誰も惜しむことはありません。誰かが罰から免れるのは、その誰かが預言者と呼ばれるからではなく、また祭司〔と呼ばれる〕からでもありません。〔しかしこれらのことは彼らについて述べられている〕、使徒が言うように、「これらのことは私たちのために、世の終わりがやって来た者たちに向けて書かれた」(Ⅰコリ10:11)。したがって、もしこれらの祭司たち——私は私たちの間の司祭たちのことを言っています——のうちの誰かが、あるいは民の周りに立つ者たちであるレビ人たち——すなわち、助祭たちのことです——のうちの〔誰か〕が罪を犯すなら、その者は罰に耐えるでしょう、すなわち、今、預言者を通じて主が強く求めている罰にです。反対に、何らかの祭司的な祝福があり、それについて、神が認めるなら、この箇所の説明の後に、民数記に至ったときに私たちが論じるように、祭司たちについては、確かにそこで何らかのことが書かれているからです。

したがって、「祭司たち、預言者たち、ユダ、そしてエルサレムに住むすべての者たちを、葡萄酒で酔わせ、また男をその兄弟から、そして父親たちを息子たちから追い散らすと神は証言している」(エレ13:13以下)。これらのことは、実際、私に見えるところでは、次のように理解されるべきです。[すなわち] 神は確かに義人たちを集めるが、罪人たちを分けるのだ、と。さらに、このことゆえに、人々が東から移されなかったとき、彼らは追い散らされることはありませんでした。しかし、彼らが「東から」(創11:2) 移り、また人がその隣人に、「来なさい、私たち自身のために、町と塔を築こう、その頂きが天まで達するような」(創11:3以下) と言うときには、神は「次のように」語り、言っています、「来なさい、私たちは降って行って、そこで彼らの言語を混乱させよう」(創11:7)。そしてすぐ後に彼は付け加えています、「そして神はそこから、全地の表から彼らを追い散らした」。イスラエルの民も、罪を犯す前にはユダにいましたが、罪の後には全地球へと散らされてしま

(創11:7)。すると、それぞれの者は混乱させられ、地のある場所に追い散らされます。そしてイスラエルの民は、罪を犯していないときにはユダにいましたが、後に罪を犯したために、居住世界から追い散らされ、至る所に散らされてしまいました。

何かこうしたことを、私たちすべてについても、私と共に理解してください。「天に記録されている、最初に生まれた者たちの」何らかの「教会」があり(ヘブ12:23)、そこには「シオンの山と生ける神の都市、天上のエルサレムが」(ヘブ12:22)「あります」。幸いな者たちは、共にいるために、そこに集められるでしょう。しかし、罪人たちはお互いと共に、そこにいられないということによっても罰せられます。私はこの生において、次のようなある者たちを知っています、すなわち、王国を苦しめた者の家族の者たちを罰の代わりにどこかの島に引き渡そうと決めた者たちを、また彼らを拷問の代わりに追い散らしさえた者たちを「知っています」。彼らはここには妻を、ここには一人の息子を、それから他のところには別の者を追い散らしました。それは、不幸の中で、母親が息子に喜びを見出すことがないように、あるいは兄弟が兄弟に「喜びを見出すことがないように」するためです。何かこうしたことを、不正な者たちについても、理解してください。神によって管理されている罪人たるあなたは、より苦い何かを味わう必要がありますが、それはあなたが教育されてから救われるためです。ちょうどあなたが、あなたによって罰せられる家内奴隷や息子を、単純に痛めつけようと思うのではなく、その者を苦痛によって立ち帰らせるために罰するように、神もまた、御言葉に立ち帰らない者たちを、癒しを得ていない者たちを、苦難から来る苦痛によって教育しているのです。教育のために、彼は自分が身につけているものを身につけるのです、次のように言われていることに従って、「すべてを通じて、苦痛と鞭によってあなたは教育されるだろう、エルサレムよ」(エレ 6:

いました。

善い人々に関しても、何かこうしたことを、私と共に理解してください。最初に生まれた者たちの何らかの教会があります。すなわち、天に記録されている者たちのことで(ヘブ12:23参照)、そこには「シオンの山と生ける神の都市、天上のエルサレムが」(ヘブ12:22)「あります」。そこに集められることになるのは、幸いな者たちです。しかし、罪人たちはお互いから分けられます、それは彼らがこの拷問においても同様に苦しめられるためです。私は次のようなある王たちを知っています、すなわち、自らの支配に畏を仕掛けた者たちを荒れ果てた島へ追放するのを常としていた者たちを、また極刑の代わりに次のことを命ずる〔のを常としていた者たち〕を「知っています」。すなわち、彼らが追放の一つの場所で窮乏に耐えるのではなく、世界の別の部分へと妻が「追い出され」、また別の「部分」へと子供たちが追い出されることを。それは彼らが、さまざまな不運の中で、確かに自らのために、慰めを享受することのないようにするためです、父が息子の「慰めを」、あるいは母が娘の「慰めを」、あるいは兄弟が兄弟の「慰めを」。同じように、罪人もまた、何らかの神の経綸を通じて、孤独という大きな拷問を経験します、もし彼がただ一人追放へと追いやられるなら、誤りを正されてからかつての状態に戻るために。そしてちょうどあなたこそが、あなたの親族や子供たちを、激しい打擲や不合理な怒りによって懲罰するのではなく、言葉によって、彼らが抱えている誤りから立ち帰ることを求めるように、神は、御言葉で回心することができない者たちを、苦痛と拷問によって彼らがかつてそうだったところに呼び戻すのです、聖書が次のように言っているのに従って、「すべての苦痛と鞭を通じてあなたは教育されるだろう、エルサレムよ」(エレ 6:7以下)。したがって、叱責するような罰の苦痛が増大するために、叱責される者たちは互いから分けられるのです。というのも、罰が幾分より軽くなるからです、

7以下)。したがって、教育をすることによる苦痛が増大するために、苦痛を得る側の者たちは互いから追い散らされるのです。というのも、これこれの者がこれこれの者と一緒にいることのないようにするためです。というのも、過度の苦痛は、各人ひとりひとりの励ましを通じて、別の者からのそれ〔励まし〕へと緩められているからです。

第4節

(ギリシア語)

しかし、もしその言葉に、追い散らされることの別の理由をも付け加える必要があるなら、私はこのことも示しましょう。悪人たちは互いに一緒にいるときには悪いことを注視し、かつ増やします、ちょうど善人たちが互いに一緒にいるときには善いことについて気を配るように。〔そして〕したがって、悪しき計画は、似たような者たちと共に強くなりましたが、崩され、そして分けられるのです、邪悪な者たちが互い〈から〉追い散らされるときに。このことゆえに、神は、卑しい者たちが互いと共にいないように管理しています、おそらく彼らもまた前もって考えているように。それは、彼らの悪が一緒に成長するのではなく、分解されて弱まるようにするためです。これらのことは、次の一節によります、「私は男やその兄弟を、彼らの父たちを、彼らの息子たちを、同じことへと追い散らす」(エレ13:14)。

「私は切望せず、惜しまず、憐れまない、彼らの腐敗に」(エレ13:14)。

第5節

(ギリシア語)

(承前) そのような言葉に対して、諸派閥からの者たち〔異端者たち〕は攻撃し、次のように言います、「あなたは造物主が次のようであることが見えるだろうか、つまり『私は惜しまず、憐れまない、彼らの腐敗に』と言うような、預言

もし多くの者たちが同じ場所に定住し、相互の慰めによって互いを慰めるなら。

(ラテン語訳)

しかし、もし悪人たちの分離の別の説明をも導入することが必要なら、私たちはこのことも示しましょう。悪人たちは一緒にいるときには悪いことを考え、そしてかつての放埒さを持続しながら、罪を罪に増やします、ちょうど、反対に、善人たちが一緒にいるときには高潔さについて話し合っているように。したがって、放埒な考えは、分解され、かつ無へと引き下ろされるのです、彼らがより放埒なもう一人との会話をしていないときに。このことゆえに、神の管理によって、最悪の者たちが最悪の者たちから分けられることが定められています。孤独そのものや交際の欠如によって、彼らが最終的にかつての犯罪から離れるのは、正しく、かつ適切でもあります。これらのことは、次のように言われていることによります、「そして私は彼らを、男やその兄弟を、彼らの父たちを、彼らの息子たちを、まさにそのことへと追い散らす」(エレ13:14)。

「私は切望せず、惜しまず、憐れまない、彼らの破滅に」(エレ13:14)。

(ラテン語訳)

(承前) そのような言葉に対してもまた、異端者たちは立ち上がり、次のように言います、「あなたは預言者たちの誤りがどのようなものであるか見えるだろうか、またあなたは神が何と言っているか読めるだろうか」と。「私は惜しまず、

者たちの神であることが」と。この者がどうすれば善であることが可能でしょうか。もし私が例として、共通善のために「罪人を」憐れまない裁判人や、良い意味で同情をしない審判者を取り上げるなら、私はその例から、神が多くの者たちを惜しむときには一人を惜しまないのだと納得させることができるでしょう。一方で、私は例として医者も取りましょう、彼「医者」が体全体を惜しむときには肢体の一部を惜しむことなどないと示すことで。このようなことが裁判人の前に提示されているとしましょう、「すなわち」平和を造り出し、また彼の下にある民に役立つものを準備することが。しかし、顔については美しく、かつ美しく見える、とある殺人者が近づくように、こちらに来るようにさせましょう。同情すべき理由を裁判人にもたらす母親がこちらに来るようにさせましょう、彼女の老齢が同情されるように。この価値のない者の妻が、[夫が] 同情されるように、こちらに来るようにさせましょう。彼の周りを取り囲む子供が祈るようにさせましょう。これらのことについて、何が共通「善」に資するでしょうか。いったい、この者は同情されるべきでしょうか、それとも同情されるべきではないでしょうか。しかし、もし同情されるなら、彼は同じことに戻ってしまうでしょう。もし同情されないなら、彼自身は死ぬことになりましたが、共通「善」はよりよいものになるでしょう。このように、もし神が罪人を惜しんで彼に同情し、彼を罰することのないように彼を憐れむなら、誰か押し潰されない者などいるでしょうか。拷問器具への恐怖ゆえに罪が止むとき、卑しい者たちのうち、誰か押し潰されない者などいるでしょうか、より悪くならない者などいるでしょうか。こうしたことが教会においても起きているのを見ることができます。誰かが罪を犯し、罪の後で交わりのために祈ったのです。もし彼がすぐに同情されるなら、共通「善」は押し潰され、他の者たちの罪は増えてしまうでしょう。しかし、もし議論において〈その〉裁判人が——同情のな

憐れまない、彼らの破滅に」。この者がどうすれば善であることが可能でしょうか。それゆえに、私は、共通の有益さのために誰かを憐れまない善い裁判人の例を取り上げましょう、それは、神が多くの者たちを惜しむときには、いかに一人を惜しまないのかを、私たちがはっきり見ることができるためです。私は「例として」医者も取りましょう、彼「医者」が体全体を惜しむために肢体の一部を惜しむことなどないと示すことで。たとえば次のようにも言われるでしょう。裁判人が次のような意図を持つようにしましょう、「すなわち」国家にとっての平穏と、彼が保護する民にとっての平和を準備すること「という意図」を。彼「裁判人」に対し、もし外見については美しく、年齢については十分に若々しい盗賊が現れたら、「[またもし] 別の側面から、髪が伸び放題の母親が、自らの高齢を彼「裁判人」が憐れんでくれるように懇願するなら、「またもし」別の「側面」から、妻が自分の夫を殺さないで済むように、涙ぐんだ声で嘆き悲しむなら、「またもし」間もなく親を失うことになる小さな子供たちも周りを取り囲むなら、裁判人は何をするでしょうか。彼は盗賊を憐れむでしょう、それともそうではないでしょうか。共通「の有益さ」に関して、何が国家にとって訳に立つでしょうか。もし彼が憐れむなら、殺人者はかつての悪事に戻ってしまうでしょう。しかし、もし彼が裁判の厳格さに留まるなら、一人の人間は死にますが、すべての民のために備えがなされるでしょう。このように、もし神が罪人を惜しむなら、また彼を憐れんで、悪事のために彼を罰することを望まないなら、誰か許可を受け取らない者などいるでしょう。今はとにかく罰のために怯えて思い留まっている悪人たちのうち誰か、何であれ自分が望んだことを果たすために、また悪へとまっしぐらに駆り立てられるために、機会に飛びつかない者などいるでしょうか。しかし、こうしたことが教会においてしばしば起きているのを、私たちは考えることができます。誰かが罪を犯し、罪の後

い者でも残酷な者でもなく、むしろ一人にも配慮する者として、さらには一人を超えて多数に配慮する者として——一人との交わりとその者の罪の赦しからくる、共通〔善〕に対する将来的な損害に目を留めるなら、明らかなことに、彼は多数を救うために一人を追いつことをするでしょう。

私と共に医者をも見てください、いかに——もし彼が、切開すべき何かを切開することを惜しむなら、もし彼が、そうした助けに伴う苦痛ゆえに、〈焼灼すべき何かを〉焼灼することを惜しむなら——いかに病氣は増え、より悪くなるのでしょうか。しかし、もし彼がいわばより大胆に切開や焼灼に取り組むなら、同情しなかったことゆえではなく、焼灼される者や切開される者を憐れまない意図を持つゆえに、彼は癒すでしょう。このように、神もまた、一人の人間を管理しているのではなく、むしろ世界全体を管理しており、天にあるものや地の至る所にあるものを治めているのです。したがって、彼は、世界全体のために、また存在するすべてのもののために何が利益となるのかに目を留め、可能な限り、一人にとっての利益をも目に留めているのです、とはいえ、それは一人の利益が世界の損害の上になるためではありません。このことゆえに、永遠の火もまた準備され（マタ 18:8、同 25:41 参照）、このことゆえに、ゲヘナもまた用意され（マタ 18:9 参照）、このことゆえに、何らかの外の暗闇もまた存在します（マタ 8:12、同 25:30 参照）。それらの必要性は、罰される者のためのみならず、とりわけ共通〔善〕のためなのです。

で交わりを求めたのです。もし彼が求めたものが彼に許されるなら、その許可は災いへと進み、また手綱が緩められたために、悪党たちに道が開かれてしまいます。しかしもし理性的な熟慮をもって彼〔裁判人〕が——憐れみ深い者としてではなく、またさらには残酷な裁判人としてでもなく、むしろあたかも一人にも配慮し、さらには皆の繁栄について対処しながら——一人を容赦することによる人々の損害を考慮するなら、まったく疑いないことに、彼は多数を無傷で救うために一人を教会から追いつことをするでしょう。

では、今度は、私と共に医者をも考慮してください、もし彼が、切開されるべき傷の切開をやめるなら、もし焼き印を必要とするものを焼灼しないなら、すなわち、そのような治療から生じる苦痛ゆえに〔焼灼しないなら〕、いかに無力さは増え、古い液体はよりひどく溢れ出るのでしょうか。しかし、いわば、もし大胆な執刀者が潰瘍に取り組み、傷を焼灼するなら、切開され焼灼される者を彼は癒すでしょう、なぜなら彼は僅かな厳しさをを用いたからです、たとえ病気の者にとっては一時的に憐れんでいないように見えたとしても。このように、神もまた、一人の人間を癒しているのではなく、むしろ世界全体を癒しており、天にあるものや地にあるもの、至る所にあるすべてのものを管理しているのです。そして彼は一人にとって相応しいものを備える一方で、さらによりいっそう、何か全世界と人間全体にとって役に立つものを備えるのです。確かに、彼は一人にとって好都合であるものもまた備えますが、それは一人の有益さが全体の損害にならないようなやり方でのことです。したがって、永遠の火（マタ 18:8、同 25:41 参照）、ゲヘナ（マタ 18:9）、そして外の暗闇（マタ 8:12、同 25:30 参照）が準備されます。それらのすべては、罰されるべき者ゆえにというより、むしろ人類全体のために置かれているのです。

第6節

(ギリシア語)

しかし、もしあなたが聖書を、罪人たちが他の者たちの教育のためにも罰される——たとえそのときに彼ら「罪人たち」が治療について諦められていたとしても——ということの証人になりたいなら、ソロモンが箴言で言っていることを聞いてください、「害毒を流す者が鞭で打たれれば、無分別な者もより抜け目なくなるだろう」(箴19:25)。彼は、鞭によって、鞭で打たれた人自身がより抜け目なくなったり、より分別あるようになったりすると言っているのではなく、むしろ害毒を流す者に用いられた鞭によって、無分別な者が無分別から分別に変わると述べているのです。というのも、このことはここで「抜け目なさ」という言葉によって示されています。そして無分別な者は、他の者たちが鞭打たれているのを見ることを通じて変わります。したがって、もし他の者たちが罰されることを通じて私たちが本当に救いに値するなら、他の者たちの罰は私たちにとって利益となるのです。そしてイスラエルの墮落が諸民族の救いにとって利益となったように、〈ある者たちの〉罰は他の者たちの救いにとって利益となるでしょう。このことゆえに、善である神は、「私は惜しまず、憐れまない、彼らの腐敗に」(エレ13:14)と言うのです。

第7節

(ギリシア語)

一つの要点は既にあらかた説明されたので、私たちは他の部分は何を私たちに教えてくれるかをも見てみましょう。「聞きなさい、そして耳を傾けなさい、そして高ぶってはならない。なぜなら主が語るからである。私たちの主なる神に栄光を与えなさい、夜になる前に、またあなたがたの足が暗い山で躓く前に。そしてあなたがたは光を期待しなさい。そしてそこには死の

(ラテン語訳)

しかし、もしあなたが聖書を、このことの証人としたいなら、すなわち、他の者たちへの教育のために——たとえ罪人たちが今や絶望的で、治療から完全かけ離れているとしても——彼ら「罪人たち」が苦しめられるということ〔の証人としたいなら〕、ソロモンが箴言で言っていることを聞いてください、「害毒を流す者が鞭で打たれれば、無分別な者もより抜け目なくなるだろう」(箴19:25)。彼は、鞭で打たれた人が、自らの懲罰のためにより抜け目なくなったり、より分別あるようになったりすると言っているのではなく、むしろ害毒を流す者の罰のために、無分別な者が愚かさから思慮深さになる〔と言っている〕のです。というのも、このことは「抜け目なさ」という言葉自体によって示されています。そして彼はその「抜け目なさ」から変わります、彼自身に責任のある罪ゆえに他の者たちが苦しめられているのを見るときに。したがって、もし本当に私たちが救いに値するなら、他の者たちが私たちの有益さのために拷問にかけられることは、私たちに益するのです。そしてイスラエルの罪が諸民族の救いのために有益だったように、ある者たちの罰は他の者たちの救いにとって有益なのです。このことゆえに、善であり慈悲深い神は、「私は惜しまず、憐れまない、彼らの破滅に」(エレ13:14)と言うのです。

(ラテン語訳)

この章はあらかた説明されたので、私たちは続きの聖書が何を教えてくれるかを見てみましょう。「聞きなさい、そして耳を傾けなさい、そして高ぶってはならない。なぜなら主が語るからである。あなたがたの主なる神に栄光を与えなさい、暗くなる前に、またあなたがたの足が暗い山で躓く前に。そしてあなたは光を期待しなさい。そしてそこには死の陰があり、そし

陰があり、そして彼らは闇へと連れられるだろう。もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は高慢の面前で泣くだろう、そしてあなたがたの目は涙を流すだろう、なぜなら主の群れは打ち砕かれたからである」(エレ13:15-17)。彼はこれらの同じ者たちが聞き、耳を傾けることを望んでいます、というのも彼は、彼らがただ聞くだけや耳を傾げるだけでは満足していないからです。それゆえに、彼は「聞きなさい、そして耳を傾けなさい」と言っているのです。それから、このことの後に、彼は彼らに高慢にならないように命じ、なされるべきことを教えています。したがって、何を聞くべきなのか、そして何に耳を傾けるべきなのか、本文そのものから理解しましょう。「あなたがたが耳を傾ける」ことを、あなたがたは耳へと受け取りますが、「あなたがたが聞く」ことを——もしそれが「あなたがたが耳を傾ける」ことの対比で言われるなら——ひょっとしてあなたがたは心へと受け取るのではないのでしょうか。そして聖書の中には、一方では、より秘密のことやより神秘的なことが、他方では、理解する者たちにとって直ちに有利なことが書かれているので、より秘密のことについては、私が思うに、「あなたがたが聞く」ことだと言われているのですが、聞く者を解釈すらしに助けることのできるような、直ちに有利なことについては、「あなたがたが耳を傾ける」こと〔だと言われている〕。したがって、もし私たちが聖書全体を調べたら、私たちは、信頼された両替人として言うでしょう、「このことについては聞きなさい、しかしこのことについては耳を傾けなさい」と。

それから、私たちが聞き、耳を傾けたとき、彼は私たちに「そして高ぶってはならない」(エレ13:15)と命じています。というのも、「高ぶる者は皆、低められる」(ルカ14:11、同18:14)からです。そして救い主が「私から学びなさい、なぜなら私は柔和で、心について低いからである。そしてあなたがたはあなたがたの魂に安らぎを見つけるだろう」(マタ11:29)と言うとき、

て彼らは闇へと連れられるだろう。もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は侮辱の面前で泣くだろう、そしてあなたがたの目は涙を流すだろう、なぜなら主の群れは打ち砕かれたからである」(エレ13:15-17)。彼はこれらの同じ者たちが聞き、耳を傾けることを望んでいます、というのも彼は、彼らがただ聞くことだけや耳を傾けることだけでは満足していないからです。このことゆえに、彼は「聞きなさい、そして耳を傾けなさい」と言っているのです。それから、このこと以上に、「高ぶってはならない」と、それに続く残りのことを「言っています」。したがって、何を聞くべきなのか、そして何に耳を傾けるべきなのか、本文そのものから理解しましょう。「耳を傾ける」とことは、私に見えるところでは、言われていることを耳で聞くことです。しかし、先行する「聞きなさい」が、もし後で述べられている「耳を傾けなさい」という彼の命令の区別のために言われているなら、このことが命じているのは、言われていることを彼らが心と感覚へと受け入れるようにということです。このことはこの箇所だけで本当なのではなく、聖書全体においても、読まれるや否や読む者たちに有益さを受け取るような、理解するのに簡単に迅速な何らかのものがありません。〔聖書には〕より秘密で言葉にならない他のものもあり、それらは、いわば、何らかの不明瞭さによって覆われています。それゆえに、隠れていて説明を必要とすることについては、私が思うに、今や「聞きなさい」と言われていますが、解釈する者の厄介事なしに聞く者にとって適切なことについては、「耳を傾けなさい」〔と言われています〕。聖書全体を概観しましょう、そして私たちは、信頼された両替人になった上で言うでしょう、「このことについては、私たちは聞かなければならない、しかしこのことについては、私たちは耳を傾けなければなりません」と。

それから、言われていることを私たちが聞き、それらに耳を傾けたとき、高まらないようにし

彼は私たちが高ぶらないように教えているのです。というのも、異なった人間的な諸々の罪の中にあって、この罪もまた私たちの中に多くあるからです。あるときには、私たちは大した理由もなく高ぶったり、確かに高ぶる必要もないことについて高ぶったりします。しかし、またあるときには、私たちは高ぶることについて合理的な理由があるため、妥当なことに対して高ぶりますが、そのようなことについても高ぶることはまったく健全ではないのです。

第8節

(ギリシア語)

しかし、私が言っていることは、このように明らかになるでしょう。ある者たちがいて、彼らは自分たちが支配者たちの息子であること、そして自分たちがこの世の評価によれば偉大な者たちの子孫であることに高ぶっていました。このような者たちは、目的のない、また関心のない事柄について高ぶるのであり、彼らを高ぶることへと駆り立てるような、合理的な説得力を持っていません。彼らが高ぶるのは、自分たちが人々を殺す権限を持っているからであり、また彼らが高ぶるのは、人々の頭を切り落とすことができるほどの、彼らが言うところの昇進を果たしたからです。そのような者たちの「栄光は、彼らの恥の中に」あります（フィリ 3:19）。他の者たちは、富——本当の富ではなく、下方の富——について高ぶります。また他の者たちは、いわば美しい家や多くの畑を持っていることについて高ぶります。これらのどれも議論には値しませんし、これらのどれについても高ぶるべきではないのです。

ましよう。「自らを低める者は皆、高くされる」（ルカ 18:14）。そして私たちの救い主が「私から学びなさい、なぜなら私は柔和で、心について低いからである。そしてあなたがたはあなたがたの魂に安らぎを見つかるだろう」（マタ 11:29）と言うとき、彼は私たちが高ぶらないように教えているのです。というのも、人類は多くの悪徳によって悩まされていますが、特にこの罪によって苦しめられているからです。傲慢さの種類は一つではありません。ある者は不合理に、また愚か者たちのやり方で、むしろ恥に値することについて、あるいは確かに高慢さの限度を超えることについて高慢になっています。またある者は、真実の見せかけによって惑わされ、自分自身にとって栄光に値すると考えることについて高ぶりますが、そのようなことについても自慢することは危険なのです。

(ラテン語訳)

私は例を取り上げましよう、それによってより明らかになるような。ある者たちがいて、彼らは自分たちが王たちの息子であること、高貴な家柄の生まれであることについて自惚れていました。このような人々は、自分たちの高慢さの影や像すらも示すことはできません。ある者たちは、そのことについて持ち上げられますが、それは彼らが人々を殺す権限を持っているからであり、また彼ら自身が考えているように、彼らは自分たちが望んだ者たちの頭を切り落とすことができる地位によって支えられているからです。そのような者たちの「栄光は、彼らの当惑の中に」あります（フィリ 3:19）。他の者たちは、富——本当のそれではなく、下方にあるかの富——について自分たちに拍手喝采します。他の者たちは、見事な家や多くの財産について傲慢にふるまいます。これらのすべてについて自慢するべきではまったくないのですが。

妥当であり相応しいものだと見なされていることが、ある者たちが考えているように、自慢

高ぶることについて妥当なのは、ある者が、自分が賢いことに高ぶるときであり、また「高ぶることについて妥当なのは、」すでに十年前から性的快楽に触れていないこと、あるいは子供の頃からですら触れていないことを自覚して高ぶるときであり、そしてさらにまた「妥当なのは、」別の者がキリストのために鎖を運んだことに高ぶるときです（フィリ 1:13、エフェ 3:1参照）。誰かが論理的に高ぶることを暗示する妥当性がここにはありますが、本当の理由に従えば、誰もそうしたことについて論理的に高ぶることなどできません。このように、これらのことについてさえ論理的に高ぶることはできないのです。パウロは自分が高ぶるための材料を持っていました、顕現を通じて（Ⅱコリ 12:1）、幻を通じて（使 16:9以下、同 18:9）、驚異としるしを通じて（ロマ 15:19、Ⅱコリ 12:12）、キリストのために彼が骨折った骨折りを通じて（Ⅱコリ 12:10）、キリストの名前が知られていないところに教会の土台を据えようと熱心に努めながら、彼が設立した教会を通じて（ロマ 15:20）。これらすべては、彼「パウロ」が高ぶるための材料で〈した〉、もし——彼が高ぶることがある意味で良いことだと思われるので——高ぶることについて妥当性をもって言うことが必要なら。しかし、それでもなお、これらのことについてさえ高ぶることは危険でないわけではないので、慈悲深い父は、彼に顕現や幻を与えるようにして、賜物の分け前として彼にサタンの使いを与えました、それは彼「使い」が彼を平手打ちするために、彼「パウロ」が得意にならないために。そして彼「使い」に関して、三度彼は主に懇願しました、サタンの使い——すなわち、彼が高ぶらないように、計画に従って彼に与えられた者——が自分から離れるように（Ⅱコリ 12:7以下）。すると主は彼に答えて——というのも、パウロは主の答えに相応しかったからです——彼に言いました、「私の恵みはあなたに十分である。というのも、私の力は弱さの中で完成するからである」（Ⅱコリ 12:9）。したがって、高ぶ

されるべきなのは、誰かがその知恵ゆえに高められるときであり、または「自慢されるべきなのは、」今や十年前から性的快楽に関する事柄に触れていないこと、あるいは幼児期から手つかずでありかつ貞潔なままであることを自覚しているときです。そしてさらにまた「それが自慢されるべきなのは、」別の者がキリストのために鎖を運んだことゆえに立てられるときです（フィリ 1:13、エフェ 3:1参照）。これらのことすべては確かに正しいと思われますし、自慢することへの何らかの説得力をもって差し出されることになります。しかし、これらのことについてさえ、もし私たちが本当に真理に従っているなら、誰かが論理的に高慢にさせられることなどないのです、なぜなら人は善いことについても、区別なしに自慢してしまうからです。パウロは高慢の材料を持っていました、自分自身に、幻、啓示、しるし、美德を持っていたのです、キリストのために彼が味わった労働を通じて（Ⅱコリ 12:1、使 16:9以下、同 18:9、ロマ 15:19、Ⅱコリ 12:12、Ⅱコリ 12:10）、キリストの名前が知られていないところに土台を据えようと熱心に努めながら、彼が設立した教会を通じて（ロマ 15:20）。これらすべては、自慢することの材料であり、またもしこのように言うことが好都合であるなら、名誉ある自惚れを差し出す妥当な理由でした。しかし、確かに、そうしたことについてさえ持ち上げられることは危険でないわけではないので、寛大で親切な父は、彼に啓示やさまざまに異なる恵みを与えるようにして、自らの賜物の取り計らいとしてサタンの使いを与えました、それは彼「使い」が彼を拳で打つために、彼「パウロ」が高ぶらないために。そして彼「使い」に関して、三度彼は主に懇願しました、つまりサタンの使い——割り当てに従って彼のために任命された者——が自分から離れるように（Ⅱコリ 12:7以下）。しかし主は彼に答えて——というのも、パウロは答えることに相応しかったからです——彼に言いました、「私の恵みはあなたに十分である。というのも、

ることなどまったく何もないのです。というのも、墮落することが高ぶることに続くからです、次のように言われているように、「破滅の前に人の心は高くされ、栄光の前にそれは低くされるだろう」(箴18:12)。これらは、「聞きなさい、そして耳を傾けなさい、そして高ぶってはならない。なぜなら主が語るからである」(エレ13:15)に関係しています。

第9節

(ギリシア語)

一方で、これらのことの後で私たちが何をするように彼が命じているかも見てみましょう。彼は言います、「私たちの主なる神に栄光を与えなさい、夜になる前に、またあなたがたの足が暗い山で躓く前に。そしてあなたがたは光を期待しなさい」(エレ13:16)。彼は神に栄光を与える者を求めているのですが、それは光があるときに神に栄光を与えるためです、なぜなら神の栄光は、夜になり闇が生じるときには、知らされることができないからです。では、いつ夜になり、またいつ夜の暗闇が生じないのでしょうか。「あなたがたの中に光があるときに働きなさい」(ヨハ9:4、同12:35)。〈光があなただの中にあります、〉もしあなたがあなたの中に、「私こそは世の光である」(ヨハ9:4)と言う御方を持つなら、このことがあなたに生じる限り、神を賛美してください。しかし、知ってください、何らかの暗闇が生じ得ることを、そして必要なのは、この暗闇が留まらず、暗くなる前に神に栄光を与えることだということを(Ⅰヨハ2:8参照)。

第10節

(ギリシア語)

おそらく、私たちは書かれていることを理解するでしょう、救い主によって言われている福

力は弱さの中で完成するからである」(Ⅱコリ12:9)。したがって、いかなることについても自慢すべきではないのです。というのも、墮落することが自惚れることに続くからです、聖書が次のように言っているように、「破滅の前に人の心は高められ、栄光の前にそれは低くされるだろう」(箴18:12)。そしてこれらのことは、確かに、彼が「聞きなさい、そして耳を傾けなさい、そして高ぶってはならない。なぜなら主が語るからである」(エレ13:15)と言ったことについて言われたのです。

(ラテン語訳)

一方で、残りの部分も見てみましょう。「私たちの主なる神に栄光を与えなさい、暗くなる前に、またあなたがたの足が暗い山で躓く前に。そしてあなたがたは光を期待しなさい」(エレ13:16)。神に栄光を与えるであろう者を、光の中で与えることを、彼は求めています、あたかも、闇が生じたときに、今や栄光を告げ知らせることができないかのように。いつ暗くなり、そしていつ闇がないのでしょうか。「あなたがたの中に光があるときに働きなさい」(ヨハ9:4、同12:35)。光があなただの中にあります、もしあなたがあなたの中に、「私こそは世の光である」(ヨハ9:4)と言う御方を持つなら、この光があなただに生じる限り、神を輝かせてください、闇があるようになると知りながら。あなたにとって、それら〔闇〕を待つことは好都合ではありませんが、それらが生じる前に、神に栄光を与えてください(Ⅰヨハ2:8参照)。

(ラテン語訳)

おそらく、あなたは目下の章を理解するでしょう、もし福音から例を取るなら。それは次のよ

音の言葉を扱うことで。それは次のように書いてあります、「昼の間に働きなさい。誰も働けないときに夜が来る」(ヨハ 9:4)。彼は、ここで、この時代を昼と名づけました。しかし、必要なこととして、私は「ここで」を付け加えました。というのも、他の箇所では、他のことがさらに明らかにされていることを私は知っているからです。したがって、彼はこの時代を昼と名づけ、一方で、闇と夜を、罰ゆえに終末と「名づけました」。というのも、「何のためにあなたがたは主の日を欲するのか。そしてそれは闇であって、光ではない」(アモ 5:18)、と預言者アモスは言っています。もし世界の終末の後に、陰鬱さ——すなわち、罪を犯したことについて罰される、ほとんどすべての人間の諸民族に伴う陰鬱さ——とは何かをあなたがたが見るなら、そのとき空気は夜になることをあなたは見るでしょうし、またもはや誰も神を賛美することができないことを「あなたは見るでしょう」、もし本当に義人たちに対しても御言葉が次のように命じて言ったなら、「行きなさい、私の民よ、あなたの部屋に入りなさい。あなたの戸を閉じなさい。ほんの少しの間隠れなさい、私の怒りの激しさが過ぎ去るまで」(イザ26:20)。これらと同時に、もし誰か可能であるならば、彼が「ほんの少しの間」と言ったことに注意してください。しかし、この「ほんの少しの間」とは、神にとって「ほんの少しの」ということであって、人間にとって「少しの」というわけではありません。というのも、何が少ないのか、また何が多いのかはそれぞれの人によるということを見なければならぬからです。そして私は、何が少ないのか、あるいは何が多いのかはそれぞれの人によるということを、例から説明したいと思います。それぞれの生物にとって、ある量の食物は、その生物の性質と比較すると少ないですが、ある量の食物は、その生物の体質と比較すると多いです。そしてこのように、人間にとっての少なさは、他の生物にとっては多くなります。言うなれば、大人にとっての少なさは、子供にとって

うに編み合わされています、「昼の間に働きなさい。誰も働けないときに夜が来る」(ヨハ 9:4)。彼は、ここで、この時代を昼と名づけました。そして、必要なこととして、私は「ここで」を付け加えました。というのも、他の箇所では、昼という語から、現在の箇所との不一致が示されていることを私は知っているからです。したがって、彼はこの時代を昼と名づけ、一方で、闇と夜を、やがて来るであろう罰ゆえに終末と「名づけました」。というのも、「何のためにあなたがたは主の日を欲するのか。そしてそれは闇であって、光ではない」(アモ 5:18)、と預言者アモスは言っています。もし世界の終末の後に、この陰鬱さ——すなわち、ほとんどすべての人間の諸民族が、自分が罪を犯したことゆえに被ることになる陰鬱さ——をあなたが熟考するなら、いかに暗闇がすべてを占領することになるかをあなたは見るでしょうし、また「いかに」そのときに誰も神を賛美することができないかを「あなたは見るでしょう」、もし本当に義人たちに対してもイザヤ書において次のように命じられているなら、「行きなさい、私の民よ、あなたの貯蔵庫の内側に。あなたの戸を閉じなさい。ほんの少しの間隠れなさい、神の怒りが過ぎ去るまで」(イザ26:20)。しかし同時に、能力のある者に、なぜ「ほんの少しの間」と言ったのかについても注目してもらいましょう。実際、この「ほんの少しの間」とは、主にとって「ほんの少しの間」ということであって、人間にとって「少しの」というわけではありません。そして、私たちは、それぞれの人たちにとって、あることがいかに僅かなのか、あるいはいかに多いのかを見なければなりません。これが証明されるために、私たちは例さえ使います。それぞれの生物にとって、その体の本質や種類に従って、食物は、僅かなときもあれば、多いときもあります。そしてある者にとっては少ないものは、同様に、まさにそれ自体、ある者にとっては多くなります。動物たちについては、何を私は言いましょう。人間自身においても、物事の

は多くなります。このように、人間の生のすべての時間や、長生きした者のそれは、現在の時代すべての全体と比較すると少ないのです。まさにこのように、神にとっての少なさ、私たちと比較すると多くなり、また時代全体は神の少なさなのです。したがって、「行きなさい、私の民よ、あなたの部屋に入りなさい。あなたの戸を閉じなさい。ほんの少しの間隠れなさい」(イザ26:20)と言われるなら、この「ほんの少しの」とは、自分自身の部屋に行って入ることを命じられている者のふるまいについてではなく、同じことを命じる者——その者にとっての少なさ、彼「別の者」にとっては多いのです——のふるまいについて述べられているのだと見なされなければなりません。というのも、もし神の怒りの激しさが過ぎ去るまで、ある者たちが自分自身の部屋に入ることが必要なら、一方で、もし罪がこの時代の全体のみならず、来るべき時代の全体にわたっても許されない者たちがいるのなら、その少なさ、言われていることにまで及ぶことは明らかだからです。

第11節

(ギリシア語)

したがって、「私たちの主なる神に栄光を与えなさい」(エレ13:16)。どのように私たちは、私たちの主なる神に栄光を与えるのでしょうか。私は音や言葉によって、私たちの主なる神に栄光を与えようとするのではなく、むしろ主なる神に栄光を与える者は、行為によって、彼に栄光を与えるのです。節制によって、神を賛美してください。正義によって、慈善によって、神を賛美してください。勇気や忍耐によって、神に栄光を与えてください。敬虔や神聖や残りの諸徳によって、神に栄光を与えてください。しかし、もしこれらのことを誰かがこのように持っており、またこのように神を賛美するなら、仮に私が反対のことを言ったとしても、私が冒渥

違いがあります。大人にとって僅かすぎるものは、幼児にとっては有り余ってしまいます。そしてこのようなやり方によって、人間の生のすべての時間は、たとえ100年を超えても、永遠と比較すれば短いのです。そしてそこから、神の少なさ、私たちにとっては多くなり、反対に、時代全体は、神に関連付けられるとき、非常に短いものとなるのです。したがって、「行きなさい、私の民よ、あなたの貯蔵庫の内側に。あなたの戸を閉じなさい。ほんの少しの間隠れなさい」(イザ26:20)と言われるなら、この「ほんの少しの間」とは、自分自身の貯蔵庫に入ることを命じられている者の本質についてではなく、[それを]命じる者——その者にとっての少なさ、大きくなるところのこのすべてなのです——の「本質について」述べられているのです。というのも、もし神の怒りが過ぎ去るまで、ある者たちが自分自身の貯蔵庫に入ることが必要なら、一方で、もし罪が現在の時代のみならず、未来においても許されない者たちがいるのなら、その少なさ、私たちが行ったことに照らして判断されるべきことについて、明らかだからです。

(ラテン語訳)

したがって、「私たちの主なる神に栄光を与えなさい」(エレ13:16)。どのように私たちは、私たちの主なる神に栄光を与えるのでしょうか。主は音や言葉によってのみ賛美されるべきではありません。高潔によって、正義によって、そして慈善によって、彼を賛美してください。勇気、忍耐、敬虔、知恵、そして残りの諸徳によって、彼を賛美してください。さて、このように神は賛美されなければなりません。仮に私が反対のことを言ったとしても、私が冒渥しているとあなたがたが考えることを、私は望んでいません。というのも、私の意見の証拠として、私は聖書を示します、高潔な人が神を賛美し、放縦な者が神の名誉を傷つけるときに。というの

しているとは考えないでください。というのも、そうしたことの証拠として、私は聖書を示しましょう。思慮深い者は神を賛美し、放縦な者は神を侮ります。というのも、彼はネブカドネツアルのように、神の神殿をひっくり返し（エレ52:13参照）、また「神の神殿を破壊し」（Ⅰコリ 3:17）、また「律法の違反ゆえに神を侮る」（ロマ 2:23）。この記述も使徒的です。したがって、罪人は神に不名誉を与えるのです。そして、摂理があるのかどうか「摂理を」ある者たちが疑うとき、摂理に関することが探求されますが、それは邪悪な理由以外の何物でもありませんでした。悪を取り去ってください、そして摂理に躓かないでください。しかし、摂理に躓く者たちは、これらのことを逆さまに言っています。なぜそれほど多くの姦淫者たちが、またそれほど多くの男娼たちがいるのか。なぜそれほど多くの無神論者たちが、またそれほど多くの不敬虔者たちがいるのか、と。また摂理への不名誉を生む者たち、神への躓きを生む者たち、世界を創造した方への冒瀆を生む者たちが、罪人たちなのです。〈したがって、一方で、ある者たちは神に栄光を〉与え、他方で、罪ゆえに神の栄光に反対のことをする者たちは、神に栄光を与えません。

第12節

（ギリシア語）

「私たちの主なる神に栄光を与えなさい、夜になる前に、またあなたがたの足が暗い山々で躓く前に」（エレ13:16）。とある暗い山々があり、とある明るい山々があります。とはいえ、両者は山々なので、両者は大きいです。明るい山々は神の聖なる天使たちであり、預言者たちであり、従者モーセであり、イエス・キリストの使徒たちです。これらのすべての山々は明るく、これらについて、詩編で次のように言われていることを私は考えます、「彼の基礎は聖なる山々に」（詩86 [87]:1）。一方で、暗い山とはいかなるものでしょうか。それは、「神の知識に

も、彼はネブカドネツアルのように、彼の神殿を破壊し、打ち壊し、また使徒によると、「律法に」違反し、また神の名誉を傷つけました。したがって、義人は神を賛美し、誰でも罪人である者は暴言を吐くのです。なぜなら、神の摂理があるかどうかある者たちが疑うこともまた、悪徳以外のいかなる理由からも生み出されることはないからです。これらを取り去ってください、そして同じように、あなたは、上方でも下方でも摂理の破壊の原因も取り除いたのです。摂理に反対して議論している者たちは、これらのことを言っています。なぜそれほど多くの姦淫者たちが、なぜそれほど多くの軟弱者たちが、なぜそれほど多くの瀆神者たちが、なぜそれほど多くの不信心者たちがいるのでしょうか。またこのように、罪人たちは摂理への暴言を、神への躓きを、そして創造主への中傷を生み出します。これらのことから、明らかに、ある者たちは神に栄光を与え、またある者たちは誹謗するのです、彼らが苦難や悪徳に使えるときに。

（ラテン語訳）

「あなたがたの主なる神に栄光を与えなさい、暗くなる前に、またあなたがたの足が暗い山々で躓く前に。」（エレ13:16）。とある暗い山々があり、とある明るい山々があります。とはいえ、両方の山々は大きいので、明るい山々は神の天使たちや預言者たちであり、彼の従者モーセであり、イエス・キリストの使徒たちです。これらについて、次のように言われていることを私は考えます、「彼の基礎は聖なる山々に」（詩86 [87]:1）。暗い山とは、「神の知識に逆らって立てられる者たち」（Ⅱコリ 10:5）です。悪魔は暗い山であり、破壊されたこの時代の支配者た

逆らって高慢さを高ぶらせる者たち」(Ⅱコリ 10:5)です。悪魔は暗い山であり、無力にされたこの時代の支配者たちは暗い山々であり、悪霊は狂気の山でした。暗い山がありましたが、それについて救い主は、「この山に向かって言いなさい」(マタ17:20)と言いました。というのも、狂気について、言葉が探され、弟子たちが「なぜ私たちはそれを追い出すことができなかったのでしょうか」と言うとき、救い主は次のように答えました、「もしあなたがたがからし種一粒ほどの信仰を持っていたなら、この山に向かって言いなさい」、その山についてあなたがたは「手」を伸ばし、その山についてあなたがたは議論しました、「この山に向かって、『ここからあそこへ移れ』と言いなさい。するとそれは移るだろう」(マタ17:19以下)、ここから、人間から、あそこへ、彼の家場所へ。したがって、蹟く者たちは明るい山々にではなく、暗い山々に蹟くのです、彼らが悪魔とその使いたち、暗い山々と共に来るときに。

「そしてあなたがたは光を期待しなさい」(エレ13:16)。実際、〈「そしてあなたがたは光を期待しなさい」〉は、「私たちの主なる神に栄光を与えなさい」に繋がれることができます。〈もしあなたがたが、〉暗くなる前に、暗い山々にあなたがたの足が蹟く前に、〈「私たちの主なる神に栄光を」与えるなら、〉明らかなことに、たとえ暗くなっても、あなたがたは光を期待し、そして光はあなたがたを受け入れるでしょう。しかし、他の者は——彼が健全に考えているのかどうか私は知りませんが——言うかもしれません、暗い山々に蹟く者たちもまた暗い山々で期待するのです、憐れみの光を期待しながら、と。というのも、これが「そしてあなたがたは光を期待しなさい」〔の意味〕であると思われます。しかし、誰かが暗い山々に来るとき、何が「そこに」あるのかを、「死の陰を」を見ましょう。暗い山々があるところに、「そこに」暗い山々そのものから生まれた「死の陰が」〔あるのです〕。

ちは暗い山々であり、狂人の悪霊は暗い山でもありました。山がありましたが、それについて救い主は、「この山に向かって言いなさい」(マタ17:20)と言いました。というのも、狂気の悪霊について、彼に対してある問いが生じました、弟子たちが「私たちはそれを追い出すことができませんでした」と言うとき。救い主は次のように答えました、「もしあなたがたがからし種一粒ほどの信仰を持っていたなら、かの山に向かって言いなさい」、その山についてあなたがたは尋ね、その山についてあなたがたは説明しました、「この山に向かって、『ここから移れ』と言いなさい。するとそれは移るだろう」(マタ17:19以下)、すなわち、人間から、彼のために指定された場所へ。したがって、蹟く者たちは明るい山々にではなく、暗い山々に蹟くのです、彼らが悪魔とその使いたち、暗い山々と共に来るときに。

「そしてあなたがたは光を期待しなさい」(エレ13:16)。実際、彼が今言った「そしてあなたがたは光を期待しなさい」は、「私たちの主なる神に栄光を与えなさい」と言われているところに繋がれることができます。もしあなたがたが、真っ暗になる前に、暗い山々にあなたがたの足が蹟く前に、「あなたがたの主なる神に栄光を」与えるなら、まったく疑いないことに、たとえ真っ暗になってあなたがたが〔光を〕期待しても、光はあなたがたを受け入れるでしょう。しかし、他の者は——正しくか誤ってか私は知りませんが——言うかもしれません、暗い山々に蹟く者たちもまた時に憐れみの光を期待するのだ、と。というのも、これが「そしてあなたがたは光を期待しなさい」を示していると思われます。しかし、誰かが暗い山々に来るとき、何が「そこに」見つかるかを見ましょう。そこには「死の陰が」あります。暗い山々があるところに、「そこに」山々そのものから生まれた「死の陰が」〔あるのです〕。

第13節

(ギリシア語)

(承前)「そして彼らは闇へと連れられるだろう」
(エレ13:16)。

「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は高慢の面前で泣くだろう」(エレ13:17)。聞く者たちのうち、一方では、隠された方法で聞く者たちが、他方では、たとえ聞くにせよ、隠された方法ではなく聞く者たちがいます。では、「隠された方法で聞く」とは何でしょうか、あるいは「しかし、私たちが語るのは、密儀において秘密にされた神の知恵です。神は私たちの栄光のために、この世より前に、それを定めた」(Ⅰコリ 2:7) とは何でしょうか。また、加えて別の場所では、「神のわざの多くは秘密になっている」(シラ16:21)とされています。もし私が律法を聞くなら、私は隠された方法で聞くか、あるいは隠された方法で聞かないかのどちらかです。ユダヤ人は、律法を隠された方法で聞くことはありません。このことゆえに、彼は外見的に割礼を受けていますが、「ユダヤ人とは外見的なもの」ではないということ、「また割礼も肉における外見的なものではない」(ロマ2:28)ということを知らないのです。しかし、割礼を隠された方法で聞く者は、密かに割礼されるでしょう(ロマ2:29参照)。過越に関して定められている諸々のことを隠された方法で聞く者は、キリストという羊から食べます。「というのも、私たちの過越の羊として、キリストが屠られた」(Ⅰコリ5:7)からです。そして彼は御言葉の肉がどんなものであるかを知っており、また「それが本当の食べ物」(ヨハ6:55)であることを知っているのです、それを共にしているのです。というのも、彼は隠された方法で過越を聞いたからです。しかし、この平均的なユダヤ人は、このことゆえに、主イエスを殺したのであり、今日もまたイエスの殺害に責任があるのです、なぜなら彼は律法も預言者たちも、隠された方法で聞かなかったからです。もしあなたが種なしパンについて読むなら、隠

(ラテン語訳)

(承前)「そして彼らは闇へと連れられるだろう」
(エレ13:16)。

「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は侮辱の面前で泣くだろう」(エレ13:17)。聞く者たちのうち、ある者たちは、隠された方法で聞き、他方では、またある者たちは、たとえ聞くにせよ、隠された方法ではなく聞きます。では、「隠された方法で聞く」とは何でしょうか。もちろんそれは、「しかし、私たちが語るのは、密儀において秘密にされた神の知恵です。神は私たちの栄光のために、この世より前に、それを定めた」(Ⅰコリ 2:7) のです。また、加えて別の場所では、「神のわざの多くは秘密になっている」(シラ16:21)とされています。もし私が律法を聞くなら、私は隠された方法で聞くか、あるいは隠されていない方法で「聞くか」のどちらかです。ユダヤ人は、律法を隠された方法で聞くことはないの、明白に割礼を受けていますが、明白に割礼を受けている者がユダヤ人なのではないということ、また肉において公然とあるものが割礼なのではない(ロマ2:28参照)ということを知らないのです。しかし、隠された割礼を聞く者である者は、隠された方法でも割礼されます(ロマ2:29参照)。過越の密儀に関する律法を隠された方法で聞く者は、羊を、すなわちキリストを食べます。「というのも、私たちの過越の羊として、キリストが屠られた」(Ⅰコリ5:7)からです。彼は神の御言葉の肉が「本当に食べ物」(ヨハ6:55)であることを知っているのです、それを食べるのです。というのも、彼は隠された方法で過越を聞いたからです。しかし、惨めなユダヤ人は、それゆえに、主イエスを殺したのであり、今日もまた彼の死に責任があるのです、なぜなら彼は律法や預言者を、隠された方法で聞かなかったからです。もしあなたが種なしパンについて読むなら、あなたは隠された方法で聞くことができ、はっきりと聞くことができます。あ

された方法で掟を聞くこと、はっきりと聞くことが可能です。あなたがたの中で種なしパン、肉としての種なしパン〔の掟〕を守る者たち——というの、過越が近いので——は皆、掟が次のように言うのを聞きません、「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は泣くだろう」(エレ13:17)。また安息日について、女性たちは預言者を聞かず、隠された方法で聞くのではなく、外見的に聞きます。彼女たちは、安息日の日中に自分の体を洗うことなく、「貧しく弱い諸要素に」(ガラ 4:9) 戻ってくるのです、あたかもキリスト——彼は私たちを完成させ、律法的な諸要素から福音的な完成へと導くのです——がいなかったかのように。

このことゆえに、律法や預言者たちを読むときには注意しましょう、それは、「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は高慢の面前で泣くだろう」(エレ13:17) という預言に私たちが屈しないようにするためです。贖いの日を理解しないために、イエス・キリストの臨在の後にユダヤ的な断食を遵守するあなたがたすべては、隠された方法ではなく、むしろただ外面的にのみ贖いのことを聞いたのです。というの、隠された方法で贖いを聞くこと〈とは〉、どのように神が私たちの罪についての贖いをイエスに課したのかを聞くことであり、また「彼こそが私たちの罪のための、いや私たちの分のためだけでなく世界全体のための贖いでもある」(Iヨハ 2:2) [「いうことを聞くことです」]。そしてもし福音の喩え話が読まれ、聞き手が外部の者たちの中にいるなら、その者はそれらのことを隠された方法では聞きません。しかしもしその聞き手が使徒であるか、あるいはイエスの家に入る者たちの一人であるのなら、その者はイエスのもとにやって来て、喩え話の不明瞭さについても尋ねます。するとイエスはそれを解釈し、その福音の聞き手は、彼の魂が泣かないように、隠された方法で彼を聞く者となるのです。というの、隠された方法で聞かない者たちの中では、魂は泣くからで

あなたがたの中で種なしパン、すなわちこれらの肉としての種なしパンを祝った者——というの、過越が近いので——は誰でも、掟が次のように言うのを聞きません、「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は泣くだろう」(エレ13:17)。また安息日について、ある女性たちは預言者を聞かず、隠された方法で聞くのではなく、公然と安息日に〔聞きます〕、彼女たちは自らを洗い、また再び「貧しく弱い諸要素に」(ガラ 4:9) 戻ってくるのです、あたかもキリストがまだ降りてきていなかったかのように、またあたかも私たちを、律法的な秘儀から福音的な完成へと、彼の洗礼で洗っていないかのように。

それゆえに、律法や預言者たちを読むときにはより注意深く気をつけましょう、それは、「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は侮辱の面前で泣くだろう」(エレ13:17) と今や言われている呪いに私たちが陥らないようにするためです。あたかも贖いの日を知らないかのように、イエス・キリストの到来の後に、ユダヤ人たちの断食を遵守するあなたがたは誰でも、隠された方法ではなく、むしろただ公然とだけ贖いのことを聞きます。というの、贖罪を聞くことは隠されており、どのように神はイエスを、私たちの罪のための贖罪だと知ることができるのでしょうか、また「彼こそが罪のための、私たちだけでなく世界全体の贖罪でもある」(Iヨハ 2:2) [「と知ることができるのでしょうか」]。もし福音における喩え話が読まれ、聞き手が外部の者であるなら、その者はそれらのことを隠された方法では聞くことができません。しかしもしその聞き手が使徒であり、またイエスの家に入る者たちの一人であるのなら、その者は彼のもとにやって来て、喩え話の不明瞭さについて尋ねます。またもし彼が聞いたことが彼によって説明されたら、福音を理解する者は、彼の魂が泣かないように、隠された方法でそれらのことを聞きます。というの、隠された方法で聞かない者たちの中では、

す。

驚くべきことに、なぜ彼は、「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたは泣くだろう」ではなく、「あなたがたの魂は泣くだろう」と言ったのでしょうか。魂だけが泣くときには、ある泣くことがあり、そしておそらく救い主はその泣くことを私たちに教えているのです、「そこに泣くことがあるでしょう」（マタ 8:12）と言って。そしてもし「今笑っている者たちに災いあれ、なぜならあなたがたは悲しみ泣くようになるから」（ルカ 6:25）と彼が言うなら、彼はその泣くことについて言っているのであり、そのことを預言者はここでも脅かして、「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は高慢の面前で泣くだろう」と言っています。というのも、あなたがたが高慢に振舞われて侮辱を受けるとき、あなたがたは泣き、「そしてあなたがたの目は涙を流すだろう、なぜなら主の群れは打ち砕かれたからである」（エレ 13:17）。もし誰かが今ユダヤ人的な状況を見て、それを古代〔のユダヤ人〕たちと比較するなら、どのようなやり方で「主の群れが打ち砕かれた」かを見るでしょう。というのも、この〔群れ〕はそのとき主の群れでしたが、自分たちのことを相応しくないと考えていたので、御言葉は諸民族へと向けられたのです（使 13:46 参照）。したがって、もしその主の群れが打ち砕かれたなら、私たち——自分自身の自然に反して、父祖たちという栽培オリーブに接ぎ木された野生オリーブである私たち——こそは、より一層恐れなければならないのでしょうか、この主の群れもまた打ち砕かれることのないように。というのも、それ〔群れ〕はまさに打ち砕かれようとしていたからです、救い主によって言われたことにしたがって、次のようにあるときに、すなわち「不法がはびこるために、多くの者たちの愛が冷めるだろう」（マタ 24:12）。というのも、この言葉は、誰についてのことでしょうか。キリスト者たちについて言われているのではないのでしょうか、「多

魂は泣くからです。

なんと驚くべきことでしょうか、彼が「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたは泣くだろう」と言わず、「あなたがたの魂は泣くだろう」と言ったとは。というのも、魂だけが泣いたからです。そしておそらくこのことは、救い主が「そこに泣くことと歯ぎしりすることがあるだろう」（マタ 8:12）と言ったことから来ています。彼が笑っている者たちに悲しみと涙を命じる脅かし——それは、預言者が思い出して次のように言っている、この泣くことについてです、〔すなわち〕「もしあなたがたが隠された方法で聞かないなら、あなたがたの魂は侮辱の面前で泣くだろう」と。というのも、あなたがたが侮辱を受けたとき、そのときにあなたがたは泣き、「そしてあなたがたの目は涙を流すだろう、なぜなら主の群れは打ち砕かれたからである」（エレ 13:17）。もし私たちがユダヤ人たちの状況がどのようであるかを考察し、それを古代の幸福と比較するなら、どのようなやり方で「主の群れが打ち砕かれた」かを私たちは見るでしょう。というのも、この〔群れ〕はかつて主の群れでしたが、彼らは自分たちが救いに相応しくないと判断したので、主の御言葉は諸民族へと向けられたのです（使 13:46 参照）。したがって、もしその群れが打ち砕かれたなら、私たち——自然に反して、父祖たちという善いオリーブに接ぎ木された野生オリーブである私たち——こそは、より一層恐れなければならないのではないのでしょうか、この主の群れが打ち砕かれることのないように。というのも、この群れもまたいつか打ち砕かれるということが今にも起こりそうだったからです、救い主によって次のように言われていることにしたがって、すなわち「不法がはびこるために、そのとき多くの者たちの愛が冷めるだろう」（マタ 24:12）。というのも、このこと、「多くの者たちの愛が冷めるだろう」は、誰について言われているのでしょうか。キリスト者と呼ばれている者たちについてではないのでしょうか。次の

くの者たちの愛が冷めるだろう」と言われているときに。次の言葉は誰についてのことでしょうか、「いずれにせよ、人の子が来るとき、はたして地上に信仰を見つけるだろうか」(ルカ18:8)。これは私たちについてでしょうか。このことゆえに、私たちはすべてのことを行うときに、自分自身に注意しましょう、なぜなら、毎日この神の群れがよりよくなり、健康になり、癒されるためです。またなぜなら、あらゆる打ち砕きが私たちの魂から離れ、その結果、私たちが完全なものとなるためです、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちにあり」(I ペト 4:11)——において。アーメン。

言葉は誰についてのことでしょうか、「いずれにせよ、人の子が来るとき、はたして彼が地上に信仰を見つけるとあなたは思うか」(ルカ18:8)。これは私たちについてではないでしょうか。それゆえに、私たちはより注意深く注意しましょう、なぜなら、毎日この主の群れがよりよくなり、健康になり、健全なままであるためです。またなぜなら、あらゆる打ち砕きが私たちの魂から離れ、私たちが主の群れになるためです、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠にある」(I ペト 4:11)——において。アーメン。

第13説教(エレ15:5-7) = ラテン語訳の第10説教

解説

第13説教は、エレ15:5-7を題材とした短編である(全3節)。第1節では、神に対する罪を犯したエルサレムには、本来であれば人間を見守ってくれる天使たちを含め、誰も情けをかけてくれないことが語られる。第2節では、字義通りの解釈からより高度な解釈へと移行し、その中で「エブス」から「エルサレム」に名前が変わったことについて、「ヘブライ人たちの子ら」の(おそらく語源的な)解釈が展開される。第3節では、「前に行く」義人と、「後ろへ行く」罪人の対比的な説明や、ソドムを振り返らずに「山」としてのイエスに行って救われるべきという解釈が提示された後、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ」について。「私は子供を持たなくされた」まで。

第1節

(ギリシア語)

強い脅しと共にエルサレムに対して言われていることを、私たちは理解したいと思います。それは次のようになっています、「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか。あるいは、誰が戻ってきてあなたの平和について尋ねるだろうか。あなたこそが私を遠ざけた、と主は言う。あなたは後ろへ行くだろう、そして私は私

(ラテン語訳)

強い脅しと共にエルサレムに対して言われていることを、私たちは理解したいと思います。それは次のようになっています、「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか。あるいは、誰が戻ってきてあなたにとって平和になることを尋ねるだろうか。あなたは私から遠ざかった、と主は言う。あなたは後ろへ行くだろう、そし

の手をあなたに伸ばし、あなたを滅ぼすだろう。そしてもはや私はあなたを許さないだろう。そして私は彼らを離散へと散らすだろう」、それから「私は子供を持たなくされた」(エレ15:5-7)。困惑が私を捉えました。私は例として、地上で支配する者の敵と認められている誰かを取ってみます。なぜなら、そのような者に憐れみを分け与えることは許されていないからです、それは、ある者が「自分を」罪に定める王を怒らせているように見えないようにするためです。また「そのような者を憐れまないことは不可能です、」ある者たちが彼のために悲しまないように熱心に争っているからです、それは、悲しむことで、自分たちが王によって裁きを下されたことに不満であるように見えないようにするためです。もしあなたがこのことを理解したら、自分自身の多くの罪ゆえに神によって罪に定められた者を私と共に見てください。そして、人間たちの本質について助けるために任命された天使たちが「彼らを」見守っているとしても、このような者が誰からも憐れまれないことを知ってください。というのも、天使たちのそれぞれは、罪を定めるのは神であること、背くのは造物主であること、諸々の罪の本質とは、善い神が罪人に反対票を投じることを——このように言ってよいなら——強いられるようなものであることを知っているの、見る者たちのそれぞれは、惜しまず、悲しまず、憐れまず、またそのような者に対する平和について願うために戻ることはないのです。

それゆえに、このエルサレムが——というのも、文字に従ってそのように言われているので——私のイエスに対する罪を犯し、またイエスが彼女「エルサレム」について次のように言い得たほどのことをしたのだと考えてください。すなわち、「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた者たちを石で打ち殺す者よ、何度私はあなたの子らを集めようとしたことか、ちょうど鳥が雛たちを羽の下に集めるようなやり方で。しかし、あなたがたはそ

て私は私の手をあなたに伸ばし、あなたを滅ぼすだろう。そしてもはや私はあなたを許さないだろう。そして私は彼らを離散へと散らすだろう。私は言った、私は子供を持たなくされた」(エレ15:5-7)。困窮が私を捉えました。私に例を取らせてください。この地の支配者に対する、ある敵や反逆者が裁かれました。この者からはあらゆる憐れみを取り去られます。すなわち、それは、罪に定められた者に対しある者が憐れみをかける一方で、その者が、憐れみをかけてくれる者を怒らせ始めることのないようにです。厳しさに加えて、彼のために決して悲しまない者たちが少なからずおり、彼らは特に、悲しみの表情で、王の裁きによって怒っているように見られることを避けているのです。もしあなたが「このことを」理解したら、多くの罪ゆえに神によって罪に定められた罪人を私と共に熟考してください。そして、無数の天使たちが人間という種族を保護しているにもかかわらず、どれほどその者がたった一人によっても決して憐れみに相応しいとは見なされていないのかを見てください。天使たちのそれぞれは、罪を定めるのは神であること、反対するのは創造主であること、そして罪とは、憐れみ深い者や慈悲深い者が——いわば——その者に対する票決を引き出さざるを得なくなったようなものであることを予見しているので、彼らは惜しまず、悲しまず、憐れまず、またそのような者に対する平和を願うために戻ることはないのです。

それゆえに、エルサレムは、以前の犯罪にこのこと——我が主イエスを十字架につけたこと——をも付け加え、その犯罪は、救い主が彼女「エルサレム」について次のように言ったほどに高まりました、すなわち、「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた者たちを石で打ち殺す者よ、何度私はあなたの子らを集めようとしたことか、ちょうど雌鶏が雛たちを羽の下に集めるように。しかし、あなたがたはそうしようとはしなかった。見よ、あなたがたの家は荒れ果てたままあなたがたによつ

うしようとはしなかった。見よ、あなたがたの家はあなたがたによって見放されている」(マタ 23:37以下、ルカ 13:34以下)、と。このエルサレムに、それが見捨てられたとおりに、見捨てられるようにさせましょう。常にエルサレムを助ける天使たち——「天使たちを通じて仲介者の手で制定された」(ガラ 3:19) モーセの律法もまた、彼らを通じて制定されました——に、エルサレムを見捨てさせ、次のように言わせましょう、「彼女の罪は大きくなった。彼らはイエスを殺し、キリストに手をかけた」と。罪がまだより小さかった限りでは、私たちはまだ彼らについて価値があると認め、励ますことができ、私たちはエルサレムを惜しむことができました。「しかし今では」誰がこのことについて惜しむのでしょうか。「もし人が罪を犯すことで人に対して罪を犯すなら、彼らは彼について祈りさえするだろう。しかし、もし彼が主に対して罪を犯すなら、誰が彼のために祈るだろうか」(サム上 2:25)。「エルサレムは罪を犯した。そのことゆえに、彼は荒波へと至った」(哀 1:8)。そしてこの彼女に対し、最初に、「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか」(エレ 15:5)と言われているのです。私たちとしては、エルサレムのために、彼女の不運に、そしてかの民に起こったすべてのことに、悲しむことはありません。というのも、彼らの「違反によって」、私たちの「救いが、彼らを妬ませるために」生じたからです(ロマ 11:11)。そして彼らの墮落は、〈主の声を通じて〉「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ」〈と言われたほど〉重大な罪となった〈ので〉、私自身もまた、私のイエスを殺した女に、「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか」(エレ 15:5) と言うのです。

第2節

(ギリシア語)

私は——御言葉が与えた道をそのときにも

て見放されている」(マタ 23:37以下、ルカ 13:34以下)、と。それゆえに、彼女は見放され、また今の時点まで見棄てられました。常にそれを助ける天使たち——「天使たちを通じて仲介者の手で制定された」(ガラ 3:19) モーセの律法もまた、彼らを通じて伝えられました——は、彼女を見捨て、次のように言いました、「多くの悪行に駆り立てられて、彼女はイエスを殺し、私たちの主に手をかけた」と。彼女がより小さく罪を犯した間は、私たちは彼女のために懇願することができ、私たちは主に嘆願することができ、私たちは彼女を惜しむことができました。「しかし今では」誰が彼女について惜しむでしょうか。「もし人が人に対して罪を犯すなら、彼は彼のために祈られるだろう。しかし、もし彼が神に対して罪を犯すなら、誰が彼のために祈るだろうか」(サム上 2:25)。「エルサレムは大きな罪を犯し、大きな罪業を続け、それゆえに激動へと至った」(哀 1:8)。そして彼女に対して「このように」言われているのです。私たちとしては、エルサレムのために、彼女の不運に、そしてかの民すべての「不運に」、悲しむことはありません。というのも、彼らの違反によって、私たちの救いが、彼らを妬ませるために生じたからです(ロマ 11:11)。そして、彼女は、主の声によって「誰がエルサレムを惜しむだろうか」と言われたほど重大な罪を犯したので、私自身もまた、私たちの主を殺した女に、「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか」(エレ 15:5) と言うのです。

(ラテン語訳)

一方で、私は——理性が私に道を開くので

持っているの——文字から、平和を見るのに既に値する各々の魂へと移ります。というのも、神聖な学びの後で、あなたはエルサレムとなったからです。それは、かつてはエブスでしたが、〈歴史が語るところでは、その場所の名前はエブスでしたが、〉後で名前が変わり、エルサレムとなったのです（ヨシュ18:28、士1:21参照）。ヘブライ人たちの子ら曰く、エブスとは「踏みにじられたもの」と解釈されるといいます。したがって、エブス、すなわち敵対する諸力によって踏みにじられた魂は変えられ、そしてエルサレム、すなわち平和の光景となったのです。したがって、もしあなたがエブスからエルサレムになるために変わったときに罪を犯したら、もし「あなたが神の子を踏みつけ、新しい契約の血を汚れたもの——彼らがそうであったように、あなたもそうでした——にしたら」（ヘブ10:29）、またもしあなたが重大な罪に陥ったら、あなたについても「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ」（エレ15:5）と言われるでしょう。「そして誰があなたのために悲しむだろうか」、もしあなたがイエスを〔敵に〕引き渡すような者になるなら。私たちのそれぞれが罪を犯すとき、またとりわけ、もしより深刻に罪を犯すなら、その者はイエスに対して罪を犯しています。しかし、もしその者が背教者でもあるなら、彼はエルサレムがイエスに肉体的にしたことを、とりわけ霊的に、彼になお一層するのです。それゆえに、「神の子を踏みつけ、自分が聖別された契約の血を汚れたものにし、恵みの霊を侮る者が、どれほどひどい刑罰に相応しいと、あなたがたは思うだろうか」（ヘブ10:29）。もしあなたが神の子を踏みつけ、恵みの霊を侮ったら、「誰があなたを惜しむだろうか、誰があなたのために悲しむだろうか、誰が戻ってきてあなたの平和について尋ねるだろうか」（エレ15:5）。罪人の魂は、あなたの平和について尋ねた神の子その人を引き渡したのです。一体誰が、再び戻ってきてから、〔そのような者の〕平和について願うことなどできるでしょうか。したがっ

——文字の低さから、霊的な理解へと移りましょう、それは、神の平和に相応しい各々の霊が、どのようにしてエルサレムと名づけられるのかを私が見るためです。というのも、神聖な学びの後で、あなたはエルサレムとなったからです。あなたは、かつてはエブスでしたが、歴史において語られているところでは、その場所の名前はエブスでしたが、後で呼び名が変えられ、エルサレムと呼ばれたのです（ヨシュ18:28、士1:21参照）。しかし、ヘブライ人たちの子孫たちが伝えているところでは、エブスとは「踏みにじられたもの」と解釈されるといいます。しかし、エブス、すなわち敵対する諸力によって踏みにじられた私たちの魂は変えられ、そしてエルサレム、すなわち平和の光景となったのです。したがって、もしエブスからエルサレムへの変化の後にあなたが罪を犯したら、またもし——誰か他の者たちのように——あなたもまた契約の血を共通のものと見なしたら（ヘブ10:29）、あなたについても「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか」と言われるでしょう。というのも、「誰があなたのために悲しむだろうか」、もしあなたがイエスを〔敵に〕引き渡すような者になるなら。私たちのそれぞれが罪を犯すたび、とりわけ深刻に罪を犯すとき、その者はイエスに対して罪を犯しています。しかし、もしその者が信仰から遠ざかりもしたなら、彼はエルサレムがキリストに肉体的にしたことを、霊的に彼にするのです。それゆえに、「神の子を踏みにじり、自分が聖別された契約の血を汚れたものにし、恵みの霊に侮りをなした者が、どれほどよりひどい刑罰に相応しいと、あなたがたは思うだろうか」（ヘブ10:29）。もしあなたが神の子イエスを踏みにじり、恵みの霊を罵倒したら、「誰があなたを惜しむだろうか、誰があなたのために悲しむだろうか、誰が戻ってきてあなたにとって平和になることを尋ねるだろうか」（エレ15:5）。罪深い魂は、平和になったことを尋ね、同時にそれを授けたイエスその人

て、「ひとたび光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊に与り、神の美しい言葉や来たるべき世の力を味わったものの、墮落し、神の子を自分自身で十字架につけ、晒し者にするような者たちが、再び悔い改めへと新しくなることなど不可能である」(ヘブ 6:4-6) ということを知っているので、私たちについても、「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか。あるいは、誰が戻ってきてあなたの平和について尋ねるだろうか」(エレ15:5) などと言われないように、あらゆることをやりましょう。

第3節

(ギリシア語)

しかし、エルサレムのそれぞれの解釈に対し、次の一節も一致するでしょう、「あなたこそが私を遠ざけた、と主は言う。あなたは後ろへ行くだろう」(エレ15:6)。なぜ、あなたが神の子を遠ざけたこと、そして神の子を遠ざけることであなたが神を遠ざけたことを言うことも必要なのでしょう。ユダヤにおける〈ところの〉エルサレム——そこから提喻的に、すべてのユダヤ人たちが理解されることができます——がキリストを遠ざけたので、このことゆえに「あなたは後ろへ行くだろう」。というのも、彼女が後ろではなく前に行ったときがあったのです。しかし、今や彼女は後ろへ行き、「そして心においてエジプトへと振り返った」(使 7:39) のです、それは明らかに彼らが後ろへ行くためです。しかし、「あなたは後ろへ行くだろう」とは何か、そして前に手を伸ばすこととは何か、次のように説明しましょう。義人は、前のことには手を伸ばしますが、後ろのことは忘れてしまいます(フィリ 3:13参照)。明らかなことに、義人と反

を殺したのです。一体誰が、あなたにとって平和になることへと戻ってきてから、さらに「その平和について」願うことなどできるでしょうか。したがって、「ひとたび光に照らされ、天からの賜物をも味わい、聖霊の関与者とされ、それにもかかわらず神の善い言葉や来たるべき世の力を味わったものの、墮落し、他方では神の子を自分自身で十字架につけ、晒し者にするような者たちが、再び悔い改めへと新しくなることなど不可能である」(ヘブ 6:4-6) ということを知っているので、私たちについても、「誰があなたを惜しむだろうか、エルサレムよ。あるいは、誰があなたのために悲しむだろうか。あるいは、誰が戻ってきてあなたにとって平和になることを尋ねるだろうか」(エレ15:5) などと言われないように、あらゆることをやりましょう。

(ラテン語訳)

しかし、残りの解釈に対し、次に来る一節も一致するでしょう、「あなたこそが私を遠ざけた、と主は言う。あなたは後ろへ行くだろう」(エレ15:6)。あなたは神の子を遠ざけ、そしてこのことによって父なる神からも離れたので、後ろに行くことになるのです。しかし、なぜ明らかなことを繰り返すことが必要なのでしょう。かつてユダヤにあったところのエルサレム——そこから比喩的に、すべてのユダヤ人たちが理解されることができます——がキリストを遠ざけたので、それゆえに後ろへ行くのです。というのも、彼らが後ろへ行かなかったときもあったのです。しかし、今や彼らは行き、「そして心においてエジプトへと振り返った」(使 7:39) のです、後ろへ行くために。しかし、「彼らは後ろへ行く」とは何か、あるいはより前に手を伸ばすこととは何か、考えてください。義人は、後ろのことは忘れてしまうものの、より前のことには手を伸ばします(フィリ 3:13参照)。罪人は、より後のことは覚えていますが、より前の

対のことを志向する者は、後ろのことは覚えています、前のことには手を伸ばしません。しかし、後ろのことを覚えている者というのは、「彼は自分の上着を取るために後ろに戻ってはいならない」(マコ13:16)と教えて言っているイエスに不従順であり、「ロトの妻を思い出さない」(ルカ17:32)と言うイエスに不従順であり、「鋤に手をかけてから後ろを振り返る者は、神の国に相応しくない」(ルカ 9:62)と言うイエスに不従順です。そして律法に書かれているところでは、天使たちは、ソドムから出てきたロトに対して次のように言いました、「後ろを見まわしてはいならない、付近のどこにも留まてはいならない。山に行って〔自らを〕救いなさい、決して一緒に連れていかれないように」(創19:17)。しかし、このことは天使的な霊に相応しい考え方——「後ろを見まわしてはいけません、常に前のことに手を伸ばしてください」——を持っています。ソドムを離れた後に、ソドムに振り向いてはいけません。悪や罪を離れた後に、それに立ち帰ってはいけないし、付近のどこにも留まてはいけません。そして、たとえばあなたが、「後ろを見まわしてはいならない」と言っている前半の掟を守っても、救われることはあなたにとって十分ではありません、もしあなたが「付近のどこにも留まてはいならない」と言っている後半の掟にも耳を傾けないなら。というのも、前進し始めた者は、たとえソドムを過ぎたとしても、ソドムの付近にいるべきではなく、むしろ付近にいることを越えて、山へ行って救われるべきだからです、「後ろを見まわしてはいならない、付近のどこにも留まてはいならない。山に行って〔自らを〕救いなさい、決して一緒に連れていかれないように」(創19:17)という一節に従って。もしあなたがソドムと一緒に連れていかれることを望まないなら、決して後ろを振り返らず、ソドムの付近に留まらず、山以外のどこか他のところにいてもいいけません。というのも、そこでだけ救われることができるからです。ところでその山とは主

ことは欲しがらないものの。しかし、より後のことを覚えている者というのは、「彼は自分の上着を取るために後ろに振り返ってはいならない」(マコ13:16)と言っているイエスの法を破っており、「ロトの妻を思い出さない」(ルカ17:32)という彼の言説に不従順であり、一方で「鋤に手をかけてから後ろに振り向く者は、神の国に相応しくない」(ルカ 9:62)と言う救い主の命令を無視しています。律法にも書かれているのを私は見出します、すなわち天使たちが、ソドムから出てきたロトに対して次のように言っていると、「後ろを見まわしてはいならない、地域のどこにも留まてはいならない。山で自らに救いをなしなさい、ひょっとして連れていかれないように」(創19:17)。あなたはこの理解をも神の霊に相応しいものとして持っています。彼曰く、「後ろを見まわしてはいならない」、すなわち、より前のことに手を伸ばしてください。あなたはソドムを離れました、ソドムに戻ってはいけません。あなたは悪や罪を離れました、それに帰ってはいけません。「地域のどこにも留まてはいならない」。そして、たとえばあなたが、「後ろを見まわしてはいならない」と言われている前半の命令を守っても、救いはあなたにとって十分ではありません、もしあなたが「地域のどこにも留まてはいならない」という続きの〔命令〕を遵守しないなら。というのも、前進し始めた者にとって、ソドムの諸地域に留まることは都合が悪いからです。そしてもしあなたがソドムを過ぎたら、また悪魔の地域から離れ、罰から自由になり始めたら、あなたが山で救われることは好都合です。「後ろを見まわしてはいならない、地域のどこにも留まてはいならない。山で自らに救いをなしなさい、ひょっとして連れていかれないように」(創19:17)。もしあなたがソドムの破滅から一緒に連れていかれることを望まないなら、決して後ろを振り返らず、彼らの地域に留まらず、他のところに進んでもいいけません。しかし、あなたがそこから離れたとき、山に登ってください、そこだけに救いがある

イエス — 「この御方に栄光と支配が永遠のうちにある」(Ⅰペト 4:11) — のことです。アーメン。

るからです、イエス・キリスト — 「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠にある」(Ⅰペト 4:11) — の名が。アーメン。